
理由ある反抗

伊藤 直人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由ある反抗

【Nコード】

N2735W

【作者名】

伊藤 直人

【あらすじ】

高校野球の名門、東尾商業へのスポーツ推薦での進学を希望する、中学三年生の井岡誠と、学業最優先の進路を強要する、父・義秀の、親子間の葛藤を書いたお話です。主人公と同じ中高生や、その年代のお子さんがいらっしゃる方に、特に読んでいただきたいと思っています。

1 (前書き)

えらーにより、更新できなくなってしまったので、新しく投稿し直します。

市立東尾中学のグラウンドで行われている、野球部の紅白戦は終盤に差し掛かっていた。3-2と紅組の一転リードで迎えた最終回。後攻白組の攻撃は二死ながらランナー二・三塁。一打サヨナラの好機に、打球が三遊間を襲った。レフト前へ抜けようかというその打球はしかし、間一髪の所でショートを守る井岡誠のグローブに拾い上げられた。誠は、元は黄色だったが、使い込んで黒ずんだ愛用のグローブから、素早くボールを右手に持ち替え、ノーステップで一塁へ送球した。ショートバウンドになった送球が、ファーストを守る小川佑介のミットに掬い上げられるのと、ほぼ同時にバッターランナーが一塁塁上を駆け抜ける。全部員の視線が、主審を務める野球部顧問青木健二に注がれた。

「アウト！」

アウトともセーフとも取れる際どいタイミングだったが、青木は力強く右拳を突き上げ、アウトの判定を下し、試合は紅組の勝利で終わった。

「3-2で紅組の勝利。礼！」

「ありがとうございます！」

ホームベース前で整列した部員達は、互いに帽子を取って頭を下げた。

「じゃあ、道具の片付けとグラウンド整備をして、解散」

誠が、バックネットの裏側にある倉庫へ、グラウンド整備用のトンボを取りに向かうと、菊

池翔太が声を掛けてきた。

「最後の守備凄かったっすね、絶対抜けると思ったのに。やっぱりこないだスカウトされちゃったから気合入ってんすか？」

翔太は誠より一年後輩で、この日は白組のセンターを守っていたが、普段は誠と二遊間コンビを組むセカンドのレギュラーだ。体格

は小柄だが、二年生部員の中では抜群のセンスを持っている。そしてスカウトというのは、県立東尾商業高校野球部の監督、西崎俊雄の事である。

東尾商業、通称“東商”^{とうしょう}の野球部は、春五回、夏四回の甲子園出場の実績を誇る名門校だ。西崎は二十五年前の夏に、東商の四番打者として甲子園に出場し、二本塁打を放つ活躍で、チームをベスト8に導いた男だった。そしてその時の二年後輩が青木である。その縁もあって、東尾中野球部で実力を認められた者は、東商野球部にスカウトされるのが通例となっており、東尾中野球部員にとって、西崎に認められることは大きなステイタスでもあった。誠達の二年先輩で、当時のキャプテンだった小松辰弥も、西崎の誘いを受けて東商入りし、東商においても時期キャプテンの座がほぼ内定している。その西崎が、先日東尾中の練習を見学に訪れた際に、三人の部員をスカウトした。エース投手で三番を打つ宮田英治、四番ファーストでキャプテンの佑介、そして一番ショート井岡誠。

東尾中野球部員にとってこの上ない名誉な事だが、誠にはその話題には触れられたくない事情があった為、わざとそっけなく答えた。「あの状況でそんな事考えらんないよ。必死で捕りに行っただけ。それに、今日は西崎監督来てないじゃん」

「でもいいプレーしたら、青木先生から報告して貰えるかも知んないじゃないスカ」

なおも食い下がる翔太の質問をさえぎるように、後ろから声を掛けたのは佑介だ。

「俺達はお前みたいに雑念だらけでプレーしたりしねえんだよ」

佑介は誠とは幼馴染であり、少年野球チーム時代からのチームメイトでもある。

「お前こないだもバレーバレーの隠し球狙って、先生に怒られたばかりだろ。もうちょっと真面目にやれよな。他所との試合になったら、出たくても出れない奴らだっているんだから、レギュラーに選ばれてる以上、例えば野球部同士の紅白戦でも、チャラチャラした態度見

せんよ」

キャプテンのお叱りを受けた翔太は、ぺろりと舌を出したおどけた表情で「はい、すみません」と言いながら、ズルズルとトンボを引きずってグラウンド整備に向かっていた。誠と佑介もトンボを担いでグラウンドへ向かう。

二人でマウンド周辺の土にトンボを掛けていると、視線は自分ならしている土に向けたまま、佑介が訊ねてきた。

「やっぱりおじさん、許してくれそうにないの？」

その質問に誠は「・・・うん」と力なく答えた。

「そっか…。まあ東商は偏差値あんま高くないし、ヤンキーとかも結構いるからな。親としては嫌かも知んないよな。せっかく成績良いのにもったいないもんな」

佑介が言うように、東商は、高校野球の強豪としては、県内でも名高いが、学校そのものの評判は決してよくなかった。事実、誠たちの先輩達にも、西崎のスカウトを受けながら、「東商はガラが悪いから」という理由で、他校へ進学する者も少なくなかったという。誠の場合、本人はそれでも東商へ行きたいと思っているのだが、父の義秀がそれに断固として反対しているのだった。だが誠は、自分の進路選択において、自分の意思より親の意思が優先されているという状況を、まだ認めたくなかった。

「でも、まだ完全に諦めたわけじゃないよ。やっぱり自分の進路なんだから自分の意志で決めないと。東商で野球やるにしても、一般受験するにしてもさ」

佑介よりも、自分自身に言い聞かせるような口調になっているのがわかった。佑介は、そんな誠の気持ちを、知ってか知らずか「そうだよな、せっかく小学校からずっと一緒にやって来たんだからさ、高校でも一緒にやろうぜ。な、誠。東商なら甲子園にだって行けるも知れないぜ」と言っ、誠の背中を、大きな手の平でぽんぽんと叩いた。

誠も、「ああ」と努めて明るい声を出したが、作り笑いが引きつ

っているのが自分でもわかってしまうほど、不自然になってしまった。

佑介は一瞬戸惑ったような表情を見せたが、誠の気持ちを察したのか、それ以上はこの話題に触れる事はせず、既に丁寧にならしてある土に、軽くトンボを掛けなおして、トンボを肩に担ぐと「よし、こんなもんでいいだろ。トンボ、倉庫にしまつて帰ろうぜ」と言つて、倉庫の方へ歩き出した。その佑介の声色も、不自然に明るかった。

幼馴染の気遣いが、嬉しくもあり、辛くもあった。

後片付けを済ませた後、誠はいつものように、佑介と共に下校した。いつもなら野球談義をしながら帰るのがお決まりだったが、その日は先刻の会話が尾を引いてしまい、どうしてもよそよそしい雰囲気になってしまっていた。お互いにその気まずさを紛らわすように、言葉を搾り出すのだが、会話が続かない。間が持たない。やがてお互いに黙り込んでしまい、佑介の家の手前の曲がり角で、別れの言葉を交わすまでは、共に下校しているというより、ただ一緒に歩いてるだけという状態だった。

「じゃあ、俺こっちだから。また明日な、誠」

「ああ、じゃあな」

いつもは、ここで佑介との会話が途切れるのが、少し名残惜しかったが、今日は、気まずい空気から開放されて、少しホッとした気分だった。

佑介と別れてから井岡家までは、徒歩で約五分程の距離だったが、自分が父を説得できるだろうかという思いが、誠の足取りを重くさせていたせいか、いつもの何倍も長く感じた。

憂鬱な気持ちのまま帰宅した誠を、母の美奈子が出迎えた。

「おかえり、誠。あら、ユニフォーム泥だらけじゃない。塾まで、まだ少し時間あるし、すぐにお風呂入っちゃったら？」

「うん」

そう言って、誠は風呂場に向かった。

汚れたユニフォームをかごに放り込み、熱いシャワーを浴びる。疲れた身体に、湯の熱さが染み渡る。できれば湯舟にも浸かりたいが、七時には塾に行かなければならないため、あまりゆっくりはしていられない。

「はああ…」

思わず、ため息が漏れた。部活の後で疲れていたこともあるが、

それだけではない。東尾商業への進学を、父に断られてから、誠は毎日、どうすれば父を説得できるだろうか、そればかり考えていた。しかし、あの融通の利かない父が、自分の主張を曲げる事など、あるだろうか。

誠が野球を始めたのは、小学三年生の時だった。きっかけは、当時仲の良かったクラスメイトに誘われたのだ。

誠が野球チームに入りたいと言いつつ出たときも、義秀は、あまり良い顔をしなかったが、週に一回、二時間だけという練習時間なら、さほど勉強に支障はないだろうと言う事で、了承してくれた。

もともと運動神経は良い方で、足も速かった事に加え、真面目で練習熱心だった誠は、めきめきと上達し、五年生で、ショートのレギュラーポジションを獲得した。

誠にとって、毎週土曜午後三時から五時まで、二時間の練習は、何よりの楽しみだった。平日の午後は、二箇所の塾を掛け持ちし、放課後自由に遊べるのは、水曜日だけだった誠は、その時間も大概野球をして遊んだ。相手が見つからなければ、一人で校舎の壁に向かって、日が暮れるまでボールを投げつけていた。

中学に上がっても、誠は一年生からサードのレギュラーに抜擢された。

そして、この時ショートを守っていたのが、辰弥だった。

軽快なグラブ捌きと強肩で、ヒットを許さない守備も、体の軸が全くブレないシャープなバッティングフォームで、広角に打ち分ける打撃も、辰弥のプレイは一つ一つが洗練されており、美しかった。辰弥のようなプレイが出来るようになりたいと、強く思った。辰弥は、誠の憧れだった。もう一度、辰弥と一緒に野球をしたいと言う事も、誠が東商で野球をしたい理由のひとつでもあった。

譲れない。これだけは、どんなに反対されても譲れない。そのためには、なんとしても、父を説得しなければならぬのだ。

義秀は、一人息子である誠に、幼い頃から厳しかった。特に職業柄か、勉強に関しては、満点でない限りは褒められる事は無く、義

秀の個人レッスンの下で、不正解だった問題の復習をやらされた。

義秀の、厳しい指導の甲斐あってか、誠の成績は小学校時代から、学年でも上位から数えたほうが早かった。クラスメイトや、教師たちからも、「井岡君は、頭がいい」と言われた事は、決して少なくなかった。そして、それが父の厳しさのおかげだと言う自覚は、誠にもあった。だが、どんなに良い成績を収めても、勉強が楽しいと思ったことは、一度もなかった。

自分は何の為に、こんな事をしているんだろう。

父に言われるままに、勉強に打ち込む自分に、疑問を感じるようになったのは、少年野球のチームメイトの言葉だった。

野球の練習中に、グローブが破けてしまったのだ。紐も何箇所か痛んでいて、今にもちぎれそうだった。誠は、家に帰ってから、義秀に新しいグローブをねだった。

それを聞いた義秀は素っ気無く「じゃあ、明日の帰りにでも、ホームセンターに寄って、買ってきてやる」と言った。

だが、誠が欲しかったのは、ホームセンターで売っているような安物ではなく。プロ野球選手が使っているような、野球用品専門メーカーのグローブだった。この時、破れてしまったグローブも、ホームセンターで買って貰ったもので、チームメイト達が使っているメーカー品のグローブが、ずっと羨ましかったのだ。

「ホームセンターじゃなくて、スポーツ洋品店で売ってるやつが欲しいんだ。ダメかな？」

「いくら位するんだ？」

「一万円くらい……」

「そんなにするのか、しかし、うーん、さすがに、このグローブをこれ以上使うのは無理だしな。よし、買ってやる」

義秀は、使い古してぼろぼろになったグローブを、手にとって眺めながら、そう言った。

「本当！？ありがとう！」

「但し」

はしゃぐ誠を制するような口調で、義秀は付け加えた。

「今度の塾のテストで、いい点が取れば、の話だ。それが出来なかったら、ホームセンターの物で、我慢しなさい」

「うん、わかった」

一瞬気落ちしたが、誠は俄然やる気になった。入念に予習をし、義秀が納得するだけの点数を取ったのだ。

「よく頑張ったな、誠。それじゃあ約束通り、グローブを買いに行こう」

返却されたテストの答案を見ながら、義秀は満足そうな笑みを浮かべ、誠の頭をなでた。

そして誠は、憧れのメーカー品のグローブを買って貰った。それまで使っていた、合成皮革の物にはない、本皮の香りに胸を躍らせた事を、今でも鮮明に覚えている。

そのグローブを始めて少年野球の練習で使った日、チームメイトの川西弘之が、誠がグローブを新調した事に気づいた。

「お前、グローブ買い換えたんだ」

「うん。塾のテストでいい点採ったら買って貰うって、お父さんと約束してたんだ」

誠がそういうと、弘之は、嘲るように言った。

「なんだよそれ、お前、親の言いなりじゃん」

「えっ？」

確かに誠は、義秀に逆らう事は殆どなかった。というより出来なかった。たまに反論しても、すぐに言いくるめられてしまう。そういうことを、繰り返すうちに、確かに誠は、言いなりと言っているほど、義秀に従順になっていった。

だがそれまで、自分と父のそういった関係に疑問を持つことは無かった。どこの家でも、子供は親の言う事を聞くのが、当たり前だと思っていた。

「そうやって、えさで釣られて、なんとも思わないのかよ、だっせえ」

誠は、何も言い返せなかった。確かにそうかもしれない。義秀は、誠が欲しがっていたからではなく、成績を上げることには利用できるかもしれないと思って、あのような条件をつけたのかもしれない。自分は、義秀の手の上で、踊らされていただけなのだろうか。

買って貰ったばかりのグローブを、愛しく思う気持ちは変わらなかった。その証拠に、こまめにローションで磨き、オイルを塗り、手入れを怠らずに大切に扱い、今でも愛用している。

だが。

お前、親の言いなりじゃん。

その日、誠の胸の奥を抉ったその言葉は、今も深く突き刺さったままだった。

まだ六月だと言うのに、この日の最高気温は三十度近かった。日中に比べれば、幾分涼しくはなっているものの、熱い湯をたっぷりと浴びて、火照った身体のまま風呂場から出れば、すぐに汗が噴き出してくるだろう。

誠は、湯のバルブを少し閉め、その締めた分だけ、水のバルブを開いた。熱かった湯が、適度に冷たい温度になり、火照った身体を心地よく冷ます。

体の火照りが冷めてからも、誠そのまま、シャワーに打たれ続け、どうしたら父を説得できるだろうかと考えていた。

考え込めば、考え込む程、心が折れそうになる。

だけど、諦めるわけにはいかない。自分の進むべき道は、自分の意思で決めなければならない。東尾商業で、野球をやりたいと言う気持ちも強かったが、それ以上に、自分の進路を父に委ねてしまう様な、弱いままの自分でいたくないという気持ちのほうが強かった。

「誠、随分長く入ってるみたいだけど、塾の時間大丈夫？」

母の声にはっとして、シャワーを止め、扉越しに尋ねる。

「今何時？」

「六時二十分。塾、七時からだっけ？」

「うん。もう出なきゃ」

風呂場から出た誠は、冷蔵庫から瓶入りの牛乳を取り出して、一気に飲み干した。微かな痛みを覚えるほど冷たさが、喉から胃にかけて、染み渡る。火照った身体は、外側と内側から冷まされ、すっかり汗もおさまった。

部屋に戻って、塾へ行く支度をしていると、ふと、先刻無造作に床に放り出した、部活用のスポーツバッグが目に入った。バックのファスナーを開き、グローブを取り出した。野球部の顧問の青木から、入部して間もない頃、型の良さを褒められた時の事を思い出す。「よく手入れがしてあるな。自分でやってるのか？」

「はい」

「そうか。偉いぞ井岡。道具を大切にする奴は、きっと上手くなる。特に内野手は、丁寧なグラブ捌きが大切だからな。これからも、大切に使えよ」

「はい」

嬉しかった。自分の野球への熱意を、褒められた気がした。でも……。

「お前、親の言いなりじゃん」

自分の野球に対する熱意と、父に対する従順さ。大きく揺れる今の自分の、その振り幅の対極にある二つの気持ちを、ともに象徴するグローブ。

高校で野球をすることになって、高校野球は硬式野球だから、軟式用のこのグローブを使うことは無い。つまり野球を続けるにしても、辞めるにしても、このグローブでプレイするのは、中学卒業までの間だけだ。役目を終えた後の、このグローブは、誠にとって、何を思い出させる物になっているだろう。

誠は携帯電話のディスプレイを開いた。待ち受け画面に映るのは、野球部の仲間たちと撮った写真。その画面箸のデジタル時計は、午後六時二十八分を示している。

誠は塾用のショルダーバッグを肩にかけ、部屋を出た。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「うん」

玄関を出て、自転車に跨る。ペダルを漕ぐ度に、洗い髪をなでる風が、心地よかった。

誠が通っている塾は、駅前の大通りに面した、六階建てのビルの、五階にある。エレベーターで五階へ上り、教室の扉を開くと、すでに何人かが席についている。二人掛けの机が、八つ、二列に並んで配置された座席の、壁に掛けられたホワイトボードから、向かって右側の列の、前から二番目の机の窓際が、誠の席だ。誠が自分の席に座ると、少し遅れて阿部亮平が教室に入ってきた。亮平は、誠とは違う中学で野球部に在籍しており、何度か練習試合でも対戦した事がある。

「よお、井岡。翔太から聞いたんだけどさ、お前東商からスカウトされたってマジ？」

亮平は、翔太と同じ少年野球チームの出身だ。上背はないが、がっしりとした体型で、強肩強打の三塁手として、青木からも一目置かれていた。

「ん、まあ、一応……」

「マジかよ！ 凄えじゃん！ 今あそこ、お前の先輩の小松さんと、一年の大谷って人が凄えらしいじゃん。来年は久々に甲子園行けそうって言われてるし、お前もしかしたら……」

「そんな簡単にいくわけないだろ。大体まだ東商に行くって、決めたわけじゃないんだから、そんなに騒ぐなよ」

一人で勝手に盛り上がる亮平を、制するように、誠は言った。

「えっ、何で？ せっかく誘われてなのに、勿体ねえじゃん」

先刻の、翔太とのやり取りを思い出し、誠は思わずため息をつく。「そんなに簡単に決めれる事じゃないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やりたいからってだけで、あっさり決められるかよ」

「じゃあ、東商に行かないとしたら、どこらへんの高校狙ってんの？」

「一応、第一志望は鶴川学園」

「鶴川学園？あそこ野球部ないじゃん」

だからこそ、選んだのだ。東商を諦めたら、もう野球はできない。だからこそ、なんとしても父を説得し、東商で野球をやるのだ。そうやって自分を追い込むために、あえて野球部の無い鶴川学園を第一志望にしたのだ。だけど、そんな事で、悩んでいる自分を、亮平に悟られたくなかった。

「うるさいな。俺の事より、阿部はどうなんだよ。志望校決まってるの？」

「俺？俺は今更悪あがきなんてしねえよ。ただ、この年で就職はまだしたくねえからな。とりあえず、入れりゃどこだっていいよ」

「そんなら、わざわざ、塾なんか来なくたっていいじゃん。お前、何で塾通ってるの？」

亮平は、何故塾に通ってるのか不思議なほど、不真面目だった。授業中にくだらない事を言って、皆を笑わせたりするのが得意で、誰からも好かれる性格だったが、肝心の成績の方は、不動の学年最下位だ。誠は、亮平のような男が、何故塾に来ているのか、不思議だった。

「別に、部活終わってから、家に帰ったって、俺一人っ子だし、やる事ねえじゃん。だったら、誰かと会える場所にいたほうが楽しいじゃん？」

「つたく、そんなんで、将来大丈夫かよ？」

ため息混じりに言いながら、自分が義秀に言われている事と同じような事を、良平に対して言っていることに、気がついた。その気持ちを持ちを紛らわすように、亮平の顔から視線を外し、教室の中を見回した。

誠達の他に、八人、計十人の生徒が、席について雑談をしている。今日は欠席者はいないようだ。それとなく聞き耳を立ててみると、自分たちのように、進路について話をしている者もいれば、部活や、新しく発売されたゲームについて話をしている者もいる。

みんなは、自分の進路をどうなふうに決めているんだろう。親や教師、塾の講師ら、大人達が勧めるままの進路を選ぶ者は何人いるのだろう。それを当たり前のように受け入れるものは、何人くらいだろう。それに抗い、別の道へ進もうと、もがいている者は何人くらいだろう。そうして決めた結果について、後悔する者と、しない者は、それぞれ何人ずつくらいだろう。そして結果に後悔した者達は、その後自分とどのように向き合っていくのだろう。そんなことを考えていると、教室の扉が開いて、数学の担当講師、早川尚樹が入ってきた。生徒達はおしゃべりを止め、皆自分の席に着く。早川は、教室の中を見渡して、欠席者がいないのを確認すると、満足そうに頷きながら言った。

「よし、今日も全員出席だな。じゃ、はじめるぞ」

塾の授業が始まって、誠はやはり集中できなかった。いつもの習慣で、ホワイトボードに書かれているものを、ノートに書き写す作業だけは怠らなかったが、早川が話している内容は、耳に入っていない。板書を終えて、ふうっ、とため息をついて、窓の外に目をやると、陽はすっかり暮れていた。帰宅ラッシュの時間のせいか、人通りは、この頃がもっとも賑やかだ。スーツを着た会社帰りのビジネスマン、自転車のかごを一杯にした買い物帰りの主婦、塾帰りの小学生。高齢者は、比較的少ない気がする。

五階という高さから、俯瞰気味に町の風景を見下ろしてみると、町を行き交う人々の姿も小さくて、地上ですれ違う時に比べ、生命感を感じない。それでも彼らは確かに生きていて、一人ひとりに人生があり、家族や友人がいて、そして彼らにもまた、それぞれの人生がある。

人類が誕生してから、今までにいくつの人生があるのだろう。これから先、いくつの人生が始まるのだろう。その時間を全て足したら、どれくらいの時間になるのだろう。そして自分の人生は、その全体の何分の一くらいになるのだろう。

地球全体と、砂浜の砂一粒くらいの比率だろうか？ いや、もっと

小さいかもしれない。それでも、自分にとっては、この人生だけが全てなのだ。この人生を、どれだけ実りあるものに出来るか、それが何より大切なのだ。そのためには、今は強い気持ちで戦わなければならぬ。決して父のものではない、自分自身の人生のために。

「どうした井岡」

「えっ……」

「上の空で、外の景色なんか見て。いつも熱心に聞いてるお前が、珍しいな。部活かなんかで、疲れてるのか？」

「いや、大丈夫です。すいません」

「そうか、それならいいけど、具合が悪いようなら、すぐに言うんだぞ」

「はい」

一応、そう答えた誠だったが、結局、その日は最後まで、授業に集中できなかった。

憂鬱な気分のまま、帰り支度をしていると、亮平が声を掛けてきた。

「井岡、ちょっとコンビニ寄ってこうぜ」

誠と亮平は、塾があるビルの隣にあるコンビニでアイスを買って、それを店先でかじっていた。

「お前、ほんとに今日ずっと、ぼけっとしてたけど、どうしたんだよ？」

「いや……、ちょっと考え事しててさ」

「東商に行こうか、どうしようかって？」

「……うん……」

学校でも塾でも、この話か。そっとしておいてほしいという気持ちもあるが、時期的に仕方ないとも言える。それに、彼らなりの意見を聞いて見たいという気持ちもあった。

「阿部だったらどうする？」

「んー、わかんねえな。まあ、俺は東商からスカウトされるほどの野球の実力も、進学校に合格できそうなほどの成績も無いからさ。」

俺からすりゃ、贅沢な悩みにも思えるけど、でもなあ……」

そこまで言って、亮平は俯いて口をつぐんだ。誠は、何も言わずに、地べたに座り込んでアイスをかじっている亮平の顔を見下ろした。亮平の話の続きは気にはなるが、せかすような事はしたくなかった。亮平は、誠との視線に気づいたのか、顔を上げて、誠の顔を見ると、再び口を開いた。

「俺や翔太がいたのチームの三コ上の先輩でピッチャーやってた人でさ、つっても、翔太が入ってくる前の年に卒業しちゃったから、あいつとは面識ないんだけど」

「うん」

「その人も野球推薦で、長浜実業に行ったんだよ。木田君って人なんだけど。」

「長実か、名門じゃん」

長浜実業は、甲子園出場回数で言えば、東商よりやや少ないが、春の選抜大会で準優勝した事がある。輩出したプロ野球選手の人数も、東商よりやや多い。

「その人の親父も、長実の元エースでさ、ガキのころから、親父さんにしごかれまくってて、その分上手かったよ。コントロールがめっちゃ良くてさ。フォアボールなんかほとんど出さないの。でも親父さんほんとに厳しかったみたいで、本人は、もう勘弁してって感じだったみたいなんだよね。野球自体は嫌いじゃないけど、あくまで楽しむレベルでやりたかったみたい。だから長実行くのも、あんまり乗り気じゃなかったんだって」

「ああ、俺とは、逆のパターンか」

「そういや、お前ん家は、親父さんが勉強に厳しいんだっけ？」

「うん、まあ、教師なんかやってるぐらいだから」

「なるほどね。で、その木田君なんだけどさ、嫌々行かされた長実で、全く通用しなくて、挙句の果てに肘壊して、結局中退しちゃったんだよね」

他人事とは、思えなかった。

父の身勝手で、自分の進路が決まってしまった時、どれほど悔しかっただろう、どれほど自分を情けないと思っただろう。その想いと、今、木田は、どのように向き合っているのだろう。

「そんでさ、こないだ、久しぶりに木田君に会って、色々しゃべったりしたんだけどさ、いつも優しくて、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴ってばっかで、なんか、かわいそうになっちゃってさ、だから、その……、井岡にも同じような事で後悔して欲しくないんだよ。木田君が言ってたんだけどさ、親父さんの強引なやり方も許せないけど、それに従うことしか出来なかった、自分の意志の弱さが一番許せないって。だからさ、お前も、後悔したくなかったら、ほんとに東商で野球したかったら、絶対諦めんなよ。お前の意志の強さ次第だぜ」

そういつて、亮平は、誠の目を真っ直ぐに見た。誠も、その視線を正面から受け止めた。だけど、二人の視線が重なっていたのは、ほんの二、三秒だった。亮平のほうが、照れくさくなって視線を外してしまったのだ。

「悪い、なんか熱く語っちゃってさ。大きなお世話だよな、お前だって、自分なりに悩んでんだろうし」

普段はお調子者で、ふざけてばかりいる亮平の、不器用な優しさが、嬉しかった。

「そんな事無いよ。聞いてよかった。ありがとな、阿部」

「そっか。そんならいいんだけどさ」

コンビニで亮平と別れ、一人家に向かう帰り道、誠は自転車を漕ぎながら、亮平が話した木田という男の話を、思い出していた。

野球推薦で進学したいという自分に、一般受験で進学しろと言う自分の父。一般受験をしたいと言う木田に、野球推薦で進学しろと言った木田の父。誠とは全く逆の形だったが、木田の気持ちたちが痛いほど良くわかる。

自分も木田のように、東商野球部のレベルの高さについていけないかもしれない、という不安は、以前からあった。

だけど、自分の意思で進んだ道なら、たとえば上手いかなかったとしても、納得できる。少なくとも、結果を全て自分で受け止めることは出来る。

だけど、仮にもし、自分が東商行きを諦め、鶴川学園へ進学して落ちこぼれ、劣等感から中退するような事があったら、そして、そうさせた父を恨むようになったら、どれほど惨めだろう。

今まで、自分の将来について考えた事はなかった。自分の将来進む道を、自分の意思で決める。当たり前の事だけれど、決して簡単ではないという事を、義務教育を終えるこの年になって、初めて知った。だけど、それが出来ないようでは、いつまでたっても親から自立できない。

まだ、胸を張って自分が大人だと言い切れるような年ではない。しかし、自分力で何も出来ないほど、子供でもないはずだ。

絶対に、木田と同じ道は辿りたくない。

絶対に、父を説得しなければならない。

家に帰ったら、今日こそもう一度、父に自分の思いをぶつけてみよう。自分は決して、野球が好きだからというだけの理由で、目先のことだけを考えて、父が示す道を拒んでいるのではない。

自分なりに、真剣に自分の将来を考えて、悩んで、その上で、自

分の進む道を、自分の意志で決めたいと考えているのだ。それが出来なければ、きっと後悔する。そして、それを父のせいにする。そんな惨めな思いは、絶対にしたくない。それだけなのだ。それだけだけど、絶対に譲れないことなのだ。

家に着いて玄関の扉を開くと、いつものように、美奈子が出迎えに来ていた。

「お帰り、疲れたでしょう？」

「うん……、父さんは？」

誠は、靴を脱ぎながら、母に尋ねた。

「今日は遅くなるみたい。他の先生達と飲みに行くって、電話あったから」

「あ……、そうなんだ」

「また、汗かいたんじゃない？お風呂入る？」

「いや、今日はもういいよ」

「そう、確かに夕方から、一気に涼しくなったものね。そんなに汗もかかなかったか。じゃあ、すぐ、ご飯にする？」

「うん」

テーブルに夕食が運ばれてくるのを待つ間に、誠は冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを取り出し、氷を入れたグラスに注いだ。氷がぴきぴきと音を立てひび割れていく。

一気に飲み干して、ふうっ、と息をつく。

肩透かしを食らった気分だった。父と、進路について、もう一度話をしたいとは、ずっと思っていた。思っではいたけれど、なかなか決心がつかずにいたのだ。

今日は、その決心がついていた。学校で佑介や翔太と、塾で亮平と、自分たちの進路について話をして、改めて、自分は東商で野球をしたいと思った。その想いを、自分以外の誰かの意思で、断ち切られたくないと、強く思った。だからこそ、決心できた。それなのに、そんな日に限って、父は酒を飲んで帰ってくるという。

義秀の帰りを待っても、酔っている父に、今の自分の気持ちをぶ

つける気にはなれない。義秀は、家ではあまり酒を飲まないが、外で飲んで来る時は、かなり酔って帰ってくる。そんな状態の父に、今の自分の真剣な気持ちをぶつける気にはなれなかった。

タイミング悪いなあ、と思いつつも、自分の父親に、自分の気持ちを伝える、たったそれだけの事に、これだけ大きな決心が必要な自分の脆弱さが、情けなくもあった。

明日だ、明日こそは絶対に、父に自分の気持ちをぶつけよう。そして、絶対に説得してみせる。しなければならぬ。いつまでも迷っていられるほど、時間は残されてはいないのだ。

義秀は、結局十一時頃に帰宅した。

誠は、その時間には、部屋の灯りを消して、ベッドで横になっていたが、なかなか寝付なかった。せっかく父を説得するために、高めた集中力が、行き場を失い、収まりがつかなかったのだ。普段なら、今頃徐々に眠気が襲ってきて、目を閉じているのに、この日は、目が冴えていて、神経も研ぎ澄まされていた。その分、扉越しに聞こえて来た両親の会話は、はっきりと聞こえた。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま。誠は？」

「もう寝たんじゃない。十時ごろには、部屋に戻ってそれっきり」
「そうか」

「誠が、どうかしたの？」

今夜のように、なかなか寝付けなくて、両親の二人だけの会話が耳に入ってくる事はあるが、この時間なら、いつも誠がベッドにいる事は、義秀も知っているはずだ。それでもあえて美奈子に尋ねたからには、義秀にも、何か自分について、考えるところがあったのかもしれない。誠は、窓から差し込む月明かりしかない、暗がりの部屋の中で、聞き耳を立てた。

「いや、別に、どうって事はないんだけど……」

義秀が言葉を詰まらせた。いつも断定的な物言いをする義秀にしては、珍しく歯切れが悪い。どうとも思っていないはずなどない。

自分なりに、感じる事があったに違いない。

知りたい。父が何を思っているのか。なぜ、この日に限って、自分の様子を気に掛けているのか、直接尋ねてみたい。

ベッドから飛び起きて、自分の思いを父にぶつけてみようか。そう思ったけれど、一度冷めてしまった想いは、簡単には、熱を取り戻せない。

自分の感情をコントロールする事って、こんなにも難しい事なんだろうか。いや、結局それは、自分の決断力が足りないだけで、意志の強い者なら、今すぐにでも部屋を飛び出して、父に自分の思いをぶつけるのではないだろうか。

やはり、自分の人生が思い通りに行かない一番の理由は、自分自身の弱さなのではないだろうか、それを父のせいにして、自分の弱さから、目を背けているだけなのではないだろうか。

そんな事を考えているうちに、両親の会話は途切れていた。微かに、水の跳ねる音が聞こえる。義秀は、もう風呂に入っているのだろう。美奈子も、義秀が上がれば、それに続いて風呂に入り、夫婦は寝室へ向かう。そうして、井岡家は一日を終える。

（今日もダメだった。でも、明日こそは、きっと）

誠は、一度萎えてしまった気持ちを、再び奮い立たせるように、自分にそう言い聞かせ、目を閉じた。

翌朝、学校へ向かう途中、佑介と合流し、しばらく歩くと、コンビニから宮田英治が出てくるのが見えた。英治は、誠や佑介と共に、西崎のスカウトを受けた野球部員の一人だ。エースピッチャーであると同時に、三番バッターでもあり、副キャプテンでもある。

「エーちゃん」

佑介がその声を掛けると、英治が振り向いた。切れ長な目に、鼻筋の通った端正な顔に、縁の無い眼鏡をかけている。

「あ、おはよう」

英治は、中学生にしては長身だが、色が白く体つきも細身で、制服を着ていると体育会系の者には見えない。しかし、ボールを低めに集める制球力は抜群で、切れ味鋭いスライダーは、誠や佑介でも簡単には捉えられない。

「昨日、どうしたの？」

並んで歩きながら、佑介が尋ねる。英治は、昨日の部活を休んでいた。

「うん、少し風邪気味だったからさ。今の時期に無理は出来ないからね」

「それって、受験に影響するからってこと？」

「誠が尋ねる。」

「勿論」

「じゃあ、エーちゃん、一般受験するの？」

「当然」

「じゃあ、東商行かないの？」

「今度は、佑介が尋ねた。」

「うん、もう正式に断ったよ」

英治は淡々と、そう言い放った。最初から、東商に行く気など、さらさら無かったかのような言い方だった。

投手に絶対的な柱がないことに悩んでいた西崎が、最も熱心にスカウトしたのは、英治だった。それだけに、佑介は驚きを隠せない様子だったが、誠は、それほど驚かなかった。英治は、大人しそうな外見とは裏腹に、意志が強く、考え方も大人びている。堅実な将来を考えれば、一般受験という選択は、当然に思えた。

「野球は、もうやんないの？」

佑介が聞くと、英治は淡々と答えた。

「いや、野球部には入ろうと思ってる。でも坊主にされるのは嫌だから、坊主にしなくてもいい学校探してるって感じ。私立は、高速厳しいところ多いから、多分公立だね」

「ああ、たしかに俺も坊主は嫌だな。それにエーちゃんが坊主なんて、絶対に似合わないそう」

佑介の言葉を聞いて、誠はふと英治の髪を見た。少し赤みがかつた色の直毛は、野球部員の中では最も長く、首筋を殆ど隠すほどだ。風を受けると、柔らかく揺れるその髪は、女性的にすら見え、英治を体育会系のイメージから、さらに遠ざける。

誠は、この髪が坊主頭になった所を想像してみたが、全くイメージがわかなかった。

「エーちゃん、最初っから東商行く気なかったの？」

「うん、野球は好きだけど、野球するために学校へ行くような選択をするつもりは、最初から無かったよ」

「ふーん、でも、やっぱり将来のこと考えたら、その方がいいのかなあ」

そういつて、誠は頭の後ろで手を組み、天を仰いだ。

「いや、俺も、別にそこまで先のこと考えてるわけじゃないよ。一応、大学には行くつもりだけど、将来やりたい事なんて、まだ何も無いし」

「じゃあ、なんで、公立受けようと思ったの」

誠の質問にも、英治はあくまで淡々と答えた。

「別に、さっき言った事以外に、たいした理由なんて無いよ」

「へえー、なんかちよつと意外」

佑介が、目を丸くする。

「意外？何が？」

「いや、なんかエーちゃんて、大人っぽく見えるから、もう自分の将来のプランみたいなの、出来上がってるんだと思ってた」

誠も、全く同感だった。英治の学業成績は、学年でもトップクラスだ。現時点で大学進学を視野に入れていることは当然として、その先の事まで、しっかりと見据えているのだろうと、勝手に思い込んでいた。

「そりゃまあ、やってみたいなあって思う仕事とかも、無いわけじゃないけどさ、高校三年間と、大学四年間、合わせて七年もあるんだよ。その間に、自分がどう変わっていくかなんて、少なくとも俺には、現時点じゃ想像もつかないよ。だから、今はまだ、そこまで自分の将来を煮詰めたり、絞り込んだりする段階じゃないんじゃないかってこと。はっきり決まってるじゃないけど、それなりに考えてはいるよ」

「やっぱり、エーちゃんは大人だなあ」

誠は、ため息混じりに言った。

「どうして？」

「いや、なんていうかさ、こう、周りに流されずに、地に足がついてるっていうか、自分の考えをしっかり持ってるっていうか。俺も将来何がしたいなんて、全然決まってるじゃないけど、もうやりたい事とか見つけてる奴だっているじゃん。そういうの見てると焦っちゃうもん」

誠の話に、佑介も同調する。

「俺もそう思う。俺は、東商で野球やるつもりだし、親にも青木先生にも、そう言ってるけど、その先のことなんて、やっぱどうなるんだろう、とかって不安になるもん。だから、誠みたいに、もっと先のこと、今の内から考えて、早く決めなきゃって焦っちゃう気持ち、俺もあるもん」

「いや、誤解の内容に言っておくけど、俺が自分の将来について、何も悩んでないってわけじゃないよ。でもさ、結局、中学生の俺達に、現時点で考えられる将来なんて、たかが知れてるじゃん。いま、将来の目標が決まってるって言ってる奴らだって、これから先に、他にもっとやりたいことが見つかるかもしれないだろ。だから、俺達ぐらいの年の奴らにとっては、将来のことを決めることより、悩んだり考えたりすることのほうが大事なんじゃないかって、俺は思うんだよね。まあ、決まってるのに越した事はないかもしれないけど」

「やっぱ、エーちゃん大人だなあ」

佑介が、改めて感心する。誠も、態度には示さなかったが、佑介と同感だった。

英治の言うとおりだ。結局、十五年かそこの人生経験しかない自分達に、出来る事なんて、たかが知れてる。でも、だからといって、大人達の言う事に黙ってしたがっていく事で、自分が大人になっ
ていけるとは思えない。

たかが知れているかもしれないけれど、出来る限り自分の力で、自分の意思で、自分の進むべき道を見極めて行きたい。そう思って、大人達の示す道を拒む子供達を、大人達は、反抗的だの、素直じゃないだのと言って、眉をひそめる。

自分の意思で行動すれば、何もかも上手くいくなどと思うほど、世の中が甘いものではない事ぐらいは、わかっているつもりだ。それでも、失敗を恐れて、立ち止まったり、誰かに頼っていたりしていたら、いつまでも子供のままだじゃないか。

素直である事と、従順である事は違う。だけど、大人達の多くは、それを履き違えてはいないだろうか。

「って言うか、井岡は、東商行くんじゃないの？」

英治からの質問に、誠は我に返った。

「えっ？」

どきりとした。佑介をちらりと横目に見ると、バツが悪そうに目

を逸らした。昨日の会話を思い出したのだろう。自分の心の弱さが、幼馴染にまで余計な気遣いをさせている事が、もどかしい。

英治にも、本当は東商に行きたいのに、父親に反対できずに、一般受験をさせられそうだななんて、言いたくなかった。昨日も、佑介と亮平に晒した自分の弱さを、英治の前でも晒さなければならぬのが、嫌だった。

「いや、そりゃあやっぱり、行きたいけどさ、なかなか簡単には決めらんないよ」

英治の質問を、中途半端にはぐらかした言葉が、自分の胸に突き刺さる。父に抗う事もできず、その弱さを、仲間の前で素直にさらけ出す事もできない。自分の弱さがつくづく嫌になる。

「へえ、それこそ意外だな。井岡だったら、迷わず推薦受けると思ってた」

「えっ、何で？」

「だって、井岡って、ほんとに野球大好きって感じに見えたからさ。練習中だって、誰よりも熱心だし。それに、東商には小松先輩もいるじゃん。むしろ断る様な理由なんてあるの？」

「いや、別にこれといって、理由があるわけじゃないんだけど……」言葉に詰まってしまう。佑介が心配そうな表情で、見つめている。「でも、まだ、ちょっと迷ってるってワケだ」

誠の気持ちを代弁するように、英治が言った。柔らかく、穏やかな口調だった。

「うん……」

「そっか、まあ、皆色々だね」

そう言ったきり、英治はそれ以上、深く追及して来なかった。マイペースで、人に干渉される事を好まない英治は、自分が他人に干渉する事も好まない。誠は、そんな英治が好きだった。

人は人、自分は自分。誰もが違って当たり前だし、人には話したくない事情があって当たり前なのだ。でも、それを弁えて人と接するのは、なかなか難しい。必要以上に深入りしてしまえば、相手を

怒らせてしまう。けど、あまりにも無関心だと、鈍感な奴だと思われるでしょう。

英治は、どちらかといえば人と距離を置く方だけど、かといって、他人に無関心な薄情者ではない。事実、野球部の後輩達にも、良くも悪くも熱くなり易い小川キャプテンより、常に冷静沈着で、客観的な視点からアドバイスをしてくれる、宮田副キャプテンを頼りにしている者も、少なくなかった。

佑介のように、幼い頃から気心が知れていて、何でも言えるような友達がいて、英治のように、適度な距離感が心地よい友達もいる。翔太のように、生意気だけど、どこか憎めない後輩もいる。誠は、東尾中野球部が大好きだ。でも、この仲間達と野球ができる時間は、もうそれほど長くは、残されていない。夏の大会が終われば、三年生は事実上引退だ。夏休みに入れば、塾の夏期講習も始まる。

未練は残したくない。後悔もしたくない。東尾中学野球部の一員として、完全燃焼したい。そして、その為には、自分はずっと、強くなければならない。

「エーちゃん、今日は、部活、出れそうなの？」

校門を過ぎ、三年生校舎の昇降口まで着いたとき、誠が英治に聞いた。

「うん、今日は全然大丈夫」

「うん、じゃあ、また後で」

「うん」

そう言っ、誠と佑介は三年七組へ、英治は三年四組の教室へ、それぞれ向かった。

午前の授業が終わり、昼休みになり、弁当を食べ終えた誠の所に、藤田隆が声を掛けてきた。

「よお、井岡。お前今月の『メジャー・リーグ』持ってる？」

「ああ、確か机の中に……」

そういつて、机の中から一冊の雑誌を取り出し、隆に手渡した。

その名の通り、アメリカのプロ野球、メジャーリーグの詳細情報が満載の、ややマニアックな雑誌だ。隆は、元は野球部員だったが、二年の秋に退部している。それでも野球そのものは大好きで、誠や佑介とは、今でもよく野球談議をする仲だ。

「サンキュー」

誠に礼を言っ、自分の席に戻って行く隆の背中を見つめて、誠はその背中に、無言で問いかけた。お前はとうするんだ？どこの高校受けるか決めたのか？それは自分の意志で決めたことなのか？親や教師に決められたことなのか？

隆は、本当に野球が好きだった。打撃練習も、守備練習も、真っ先に駆け出して懸命に取り組んでいた。

だが、隆には才能が無かった。小学校時代は、弱いことで有名な少年野球チームで、セカンドのレギュラーを勤めていたそうだが、中学では、どんなに練習を積んでも、殆ど上達しなかった。それを露骨にバカにする者も少なくなかった。

「センスねえ癖にでしゃばんなよ」

「もう辞めた方がいいじゃねえの？」

しかし、心無い言葉を浴びせられても、隆は必死に努力した。チーム内の紅白戦の最中、ピッチャーの動きに集中するあまり、青木のサインを見落として、即座に交代させられても、後輩の翔太がセカンドのレギュラーに選ばれても、隆は諦めなかった。

だが、二年の秋に、肩を痛めた。医者に見せたら、野球を続ける

のは無理だと言われたらしい。それでも、まだ隆は諦めなかった。野球部の練習に参加し続けた。しかし、やはり隆の肩は限界だった。サードから一塁への送球はおろか、キャッチボールもままならない。肩が痛む事を恐れる気持ちだが、無意識のうちにフォームを狂わせ、もともと制球が不安定だった隆の投げるボールは、どこへ飛んでいくか見当がつかないほど、不安定になってしまった。

「これ以上いたら、皆にも迷惑だから」

最後にそう言い残して、隆は野球部を辞めた。

隆は、成績もあまり良くなかった。塾などにも通っているはずだが、あまり成績の向上には結びついていないようだった。

大好きな野球もできずに、受験できる高校の選択肢も決して多くない。その将来に、同情するのは、傲慢だろうか？でも、自分の境遇は、客観的に見れば、隆よりもだいぶ恵まれているだろうと思う。甘えは許されない、恵まれた選択肢の中から、勇気を持って、自分の意思で、進むべき道を決めなければならない。

自分の席に戻って、ぼんやりと雑誌のページをめくる隆の姿を見て、誠は改めてそう思った。

午後の授業が終わり、部活の時間になった。

「アップが終わったら、打撃練習だ。一人3ストライクまで。まずは、レギュラー陣が打順どおりに、打席に入れ。その後は控え選手が一巡するまで続ける。打順が回って来るまでは、それぞれの守備位置に就く。宮田は、ピッチングに専念して、バッティングは最後だ」

「はい」

青木の指示に、英治が頷く。部活の時には、眼鏡を外している分、いくらかスポーツマンらしく見える。

準備運動を終え、一番バッターの誠が、左バッターボックスに向かった。

白い線で囲まれた長方形の中に入り、スパイクで軽く土をならし、バットの先でホームベースの角を軽く叩く。

三年生にとっては、最後の公式戦となる夏の大会まで、残り一ヶ月を切っている。部員達の練習態度にも、そろそろその緊張感が現れ始める頃だ。

誠も、徐々に緊張感が高まってきた。今までに無い程、悔いを残さない試合をしたいという気持ちが強いのが、自分でもはっきりと分かる。

中学最後の大会だから、当然かもしれない。でも、もともと自分は、闘争心の強いタイプではない。やるからには勝ちたいという気持ちは、いつだってあるけど、楽しめればそれでもいいという気持ちのほうが、いつもは上回っている。でも今は、何か違う。

落ち着け。ここで終わりじゃないんだ。この大会が終わったら、東商で甲子園を目指すんだろう。あのわからずやの親父を、説得して見せるんだろう。自分に言い聞かせる。

マウンド上の英治は、いつものように淡々とした様子で、ロージ

ンバッグを拾い上げ、二、三度指先でそれを擦ると、もとあった場所にそれを落とし、指先に軽く息を吹きかけた。微かに舞い上がった白い煙が、ただでさえ無表情な英治の顔を、さらに見づらくさせる。

鼻眉目なしに、英治はいいピッチャーだと思う。チームメイトだから、当然、試合で真剣勝負をしたことは無いが、こうして練習中に実践的な勝負をしたことは、数え切れないほどある。ミートにはそれなりに自信のある誠でも、簡単に打ち込んだ記憶は、殆どない。コントロールのいい英治は、じつくりとボールを見極めようとしていると、あつという間に追い込んでしまう。どちらかといえば慎重な誠には、相性も悪いのかもしれない。

だけど、今日は絶対に、英治の球を打ちたかった。英治はいい奴だとは思うけど、西崎からの誘いを、あつさり断った男には、絶対に負けたくない。決して、英治が憎い訳ではない。むしろ、いい奴だと思っている。だけど、自分の野球への想いを、自分自身に証明するためにも、ここは絶対に負けられない。

肩幅に足を広げ、軽く膝を折る。バットは気持ち短めに持ち、やや寝かせ気味に構える。誠が一番バッターとして定着した二年前の秋、辰弥に教わった、ミート重視の構えだ。

英治がキャッチャーのサインに頷いた。ノーwindアップから、コンパクトで動きに無駄の無いきびきびとしたホームから、アウトコース低めに、キレのいいストレートが投げ込まれる。甘い球ではないが、決して手が出ないほど難しい球でもない。誠の読みどおりのボールだった。

英治は、決して非力な投手ではないが、力でねじ伏せるような豪腕タイプではない。打者の癖や傾向を読んで、駆け引きで打ち取るタイプだ。誠が普段は、初球にあまり手を出さないことを計算に入れて、見送るはずだと踏んでの配球だろう。

誠は、バットを振り抜いた。自分でも驚くほど、スムーズにバットが出た。金属音が響き、それとほぼ同時に、両手にボールを捉え

たという感触が伝わってくる。

ショートの上、普段は自分が守っているポジションにいる控え選手が、ジャンプして目一杯伸ばした左手のグラブを掠めるようにして、打球はレフト前に落ちた。

「ナイスバッティング！いいぞ井岡。初球だって打てると思ったら積極的に打っていけよ」

「はい！」

二打席目の初球にも、誠はバットを出した。今度はインコース低め、膝元に食い込むスライダー。英治の決め球だ。これも読みどおりだった。理由なんて無い。なんとなく、このボールが来るような気がただけだ。今までの自分なら、こんな難しい球を狙って打ちに行くなんて考えられない。だけど、今日は何故か、じっとしていられない。バットを振らずにいられない。

肘を畳んで膝を曲げ、腰の回転を使ってコンパクトにバットを振り抜く。今度はライト線を破るツーベースコースだ。自分でも少し驚いた。英治の球を二球続けて、こんなに綺麗に捉えられた事は、今まで一度も無かったはずだ。

「いいぞ井岡！その調子だ！」

「はい！」

今度はどんな球で来るか。マウンド上の、英治の表情に変化は無い。読めない。ならばこちららも、あれこれ考えるのはよそう。来た球を打つ。それだけだ。

そうだ。攻めろ、止まるな、行動しろ、積極的になれ。あれこれ考えるのは、その後でいい。

次に英治が投じたのは、ど真ん中への、渾身のストレートだった。球種やコースを見極める余裕は無かった。ただ、バットを振り抜いた。殆ど反射的に、体が動いた。今度も、ジャストミート。

次の瞬間、思わず、あっ、と息を飲む。ライナー性の打球が、英治の顔に向かって飛んでいくのが、スローモーションのようになって見えた。

「危ない！」

崩れ落ちるような体勢から、英治が反射的に突き出したグローブに、打球が収まる。

英治は立ち上がると、ユニフォームについた土を手ではたきながら、珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべながら、誠に聞いた。

「わざと？」

誠も、笑いながら答える。

「うん、わざと」

「こら、井岡。冗談でもそんなこと言うな」

後ろから、審判を勤めている青木にたしなめられる。

「でも、ほんとにいいバッティングだったぞ。最後もアウトにはなかったけど、宮田の全力投球を、綺麗に捉えたもんな。勿論捕った宮田も、ナイスキャッチだ。でも、それにしても今日の井岡は気持ちに乗ってるな。お前はいつも一生懸命だけど、今日は特に気持ちが入ってる感じがする。最後の公式戦まで、もう少しだからな。その調子でチームを引っ張ってくれよ」

「はい」

誠は、青木に一礼してベンチへ戻り、ヘルメットを置くと、愛用のグローブを持って、ショートの守備に就いた。

青木は、いつも誠を誉めてくれる。特に、心を誉めてくれる。ミスをしてしまった時にも、温かい言葉を掛けて、励ましてくれる。誰に対してもそうだ。青木のおかげで、どれほど自分に自信を持てただろう。何度失敗から立ち直れただろう。周囲の教師から、青木先生は甘い、とたしなめられる事も少なくなかったと聞く。

甘さと優しさは、紙一重なのかもしれない。それでも、誠は青木が好きだった。青木のおかげで、名門東商からスカウトされるほどの選手になれた。もっと上手になりたい。もっと野球がしたい。こんなところで、自分以外の誰かの意思で、自分の野球を終わりになんて、させられてたまるか。

英治は、二番の翔太を、得意のスライダーで三振にしとめた。悔

しさに顔を歪めた翔太が、セカンドのポジションに向かう。

三番の英治の打順を飛ばし、四番の佑介が、バッターボックスに入った。

佑介、俺の所に打って来い。そう思った。

初球。インコース低目へのストリート。佑介が一番苦手なコースだ。窮屈そうなスイングになりながらも、何とかバットに当てたが、完全に差し込まれてファール。

二球目。アウトコース低め、ストライクゾーンからボールになるスライダー。佑介は、出しかけたバットを、途中で止めた。コースは完全なボールだが、スイングか、ハーフスイングかは微妙だ。バット、止まってますよね、と言いたげに、青木の方を振り返る。

「ボール」

青木のコールを確認した佑介は、何度か小さく頷くと、再びバットを構えた。佑介も、いつも以上に気合が入っているように見えた。カウント1ー1からの三球目。インコース高めのストリート。佑介は、今度はしっかりとバットを振り切った。しかし、二球目の残像があったのか、最も得意なはずのコースのボールに、佑介は差し込まれ、力の無い打球がレフトとショートの間に、フラフラと上がった。

「レフト！」

「ショート！」

ナインが口々に叫ぶ。どちらの守備範囲とも言えない、微妙な打球。ポテンヒットになるかもしれない。だが。

捕れる。

打球が上がった瞬間、そう判断した誠は、一度打球から目を切り、後方へ全力で走った。もう一度打球を見る。思ったより伸びている、でも、飛びつけばあるいは……。

迷うな。行け。

自分の声が、聞こえたような気がして、誠は力強く足を蹴って左手を目一杯突き出した。グローブの先にボールの重みを感じた次の

瞬間、うつぶせの姿勢から、つんのめる様に倒れ込んだ。着地の寸前にぎゅっと閉じた目を開き、左手を見ると、相棒はしっかりとボールを捕まえていた。

「ナイスショット！」

セカンドから回り込んできた翔太が、そう言って手を差し出した。誠も手を差し出し、翔太に腕を引かれながら立ち上がる。

「絶好調じゃないスカ。さすが、未来の甲子園球児！」

翔太にそう言われて、誠は少し照れてしまったような気持ちになった。

「何言ってたんだよ。大会近いんだから、お前も気合入れとけよ」

そういった後で、翔太の言葉を胸の内で繰り返す。未来の甲子園球児。東商野球部へ入ったとしても、自分の力が、どこまで通用するかなんて分からない。それでも、可能性はあるはずだ。東商のレギュラーの地位を勝ち取る事ができれば、高校野球の聖地、甲子園の土を踏む事も、決して夢ではない。そのチャンスが、今の自分にはあるのだ。そのチャンスを、逃したくない、手放したくない。挑戦してみたい。

佑介が、英治の球を捕らえた。今度は三遊間への痛烈な打球。逆シングルの姿勢で打球に飛びついたが、わずかに届かなかった。起き上がり際に佑介の方を見ると、こっちを見て笑っている。

俺も負けないぜ。だから、お前も諦めるなよ。東商に行って、これからも一緒にやろうぜ。佑介の目が、そう言っている気がした。

誠も、少し笑った。

練習が終わり、いつものようにグラウンド整備をしていると、佑介が声を掛けてきた。

「随分、気合入ってたじゃんかよ」

そういった佑介の顔は、どこか嬉しそうだった。

「当たり前だろ。最後の公式戦まで、一ヶ月切ってたんだから」

「最後にする気なのか？」

佑介の顔は笑っている。

「してたまるかよ」

誠も、笑顔でそう返す。

「だよな。誠、青木先生にも相談してみようぜ。もしかしたら、おじさん、説得してくれるかもしれないぜ」

そうか、顧問である青木に相談すれば、力になってくれるかもしれない。

「そうだな。帰りに、ちょっと話してみようかな」

「がんばれよ。校門のところで、皆と待ってるからな」

そういつて、親指を立てた佑介に、誠も同じ仕草で応える。

「うん」

グラウンド整備と、道具の片づけを終えた後、誠は、青木を呼び止めた。

「先生」

職員室へ引き返そうとしていた、青木が振り返る。

「どうした、井岡」

「あの、ちょっと話したい事があるんですけど」

「何だ？」

「あの、進路の事なんですけど……」

「東商の推薦の件か？」

青木の顔が、引き締まったのが分かった。おそらく青木も、西崎

の誘いを受けた三人の中で、唯一明確な返答をしていなかった誠の事を、気にしていたのだろう。

「俺、東商で野球がしたいです。でも、親父に反対されてて……」

「そうだったのか。それで返事が遅れてたのか。確か、井岡の親父さんて、学校の先生だったよな」

「はい」

「確かに、親父さんの立場からしたら、一般受験して欲しいと思うかもしれないよな」

青木の言葉に、不安がよぎる。先生、あんたも一緒かよ。結局学歴が全てかよ。信じてたのに。あんたは違うって、あんたなら力になってくれるって、信じてたから相談したのに。

「でも」

誠の不安を打ち消すように、青木は続けた。

「井岡の進路は、他の誰でもない、井岡自信のものだからな。お前が東商で野球をやりたいって言うんなら、俺はその気持ちを尊重したい」

よぎった不安が消し飛ぶ。やっぱりこの人に相談してよかった。大人の中にも、こんな風に子供の立場に立って、ものを考えてくれる人もいるんだ。

「家に連絡して、俺が親父さんに相談してみようか？」

青木の言葉に、一瞬期待してしまう。自分が言うより、顧問の青木が話した方が、義秀を説得しやすいかもしれない。でも……。

言葉に詰まる。青木は急かす事はせずに、誠が事得るのをじっと見守っていてくれているように見える。

甘えてはいけない。頼ってはいけない。ここで誰かの力を借りるわけにはいかない。

「いえ、やっぱり、それは自分でやります。わざわざ、話聞いてくれたのに、すみません。やっぱり、自分の力で、親父を説得してみます」

そうだ。他の誰かに頼ってはいけない。それに、青木が義秀に相

談してくれたとしても、義秀がそう簡単に、納得するとは思えない。もしかしたら、余計に話がこじれてしまうかもしれない。そうなったら、青木を恨む気持ちが生まれるかもしれない。それは嫌だ。この人を、嫌いになりたくない。

「そうか。井岡、随分大人になったな」

青木の表情が崩れる。

「えっ？」

「いや、なんて言うか、井岡はいつも真面目で、俺も含めて、先生や親の言う事に反発するような事とかって、今まであんまり無かっただろう？それは、基本的にはいいことなんだろうけどさ、でも、俺は少し不安だったんだよ。本当に、この子は大人達の言う事に納得してるのになって、本当は、言いたい事があるのに、そういう気持ちを押し殺して、我慢してるんじゃないかなって。もっと自己主張してもいいじゃないかなって、少し心配だったんだ」

「先生……」

「がんばれよ、井岡。親父さんと話し合って、お前がどんな結論を出したとしても、俺はそれを尊重するよ」

そういつて、青木は両手で誠の肩を優しく掴んだ。

「ありがとうございます」

嬉しかった。この人に相談してみてよかった。自分の野球への想いを、こんなにも大切にしてくれる大人がいる。それだけで、自分は決して間違っではないという気になれた。勇気をもらえた。

「何とか、自分で親父を説得してみます」

「そうだな、自分の事は、自分で出来るようにならないとな」

「はい、失礼します」

そう言って、誠は、青木に頭を下げた。

薄暗くなった学校を出ると、校門の所で、佑介達が待っていた。

「どうだった？」

と、佑介。

「うん、やっぱり、相談してよかった」

「先生、おじさんのこと説得してくれそう？」

「ん、そういうわけじゃないけど、でも、いいんだ」

佑介の顔色が変わる。

「なんだよそれ、おじさんの事、説得してくれるように、先生に頼んだんじゃないのかよ？」

「そんな事頼んでないよ。ちょっと、親父を説得するのに手こずってるって、そう言っただけ。それで、先生と話して、相談してよかったって、俺は思った。それで充分だよ」

「でも、誠……」

佑介は、まだ腑に落ちない様子だった。

「まあまあ、井岡自身が先生と話して、それでよかったって思ってるんだから、それでいいだろ？」

英治が、佑介をたしなめるように、そう言った。こういうところが、英治は大人だと思う。勿論佑介もいい奴だけど。

「じゃあ、やっぱ、井岡先輩、東商行くんスか？」

翔太が尋ねる。

「行くよ。絶対行く」

宣言した。みんなの前で、はっきりと言い切った。言った以上、もう後戻りはできないぞというところまで、自分を追い込むために。

「よし、やろうぜ、誠。一緒に甲子園行っちゃおうぜ」

佑介が、肩に手を置く。

「ああ」

やれる。今日ならきつと、父に自分の気持ちぶつけられる。簡単には、いかないかもしれない。だけど、絶対に諦めない。諦めるものか。

「ただいま」

家に帰ると、いつものように母が出迎えてくれた。

「お帰り、今日も随分練習がんばったのね」

泥だらけのユニフォームを見て、優しく微笑んだ母の顔を見て、誠は少し、考え込んだ。

母さんは、どう思っているんだろう。

井岡家では今の所、誠は義秀の意向に従い、一般受験をするという事になっている。

母はどう思っているのだろう。自分が、本当に、義秀の意見に納得した上で、その考えを受け入れたと思っているのだろうか。

自分が、まだ野球への未練を断ち切れてないことに、気づいているのだろうか。もし、その気持ちを、自分が父にぶつけたら、母は自分の味方になってくれるだろうか。

父とは対照的に、母はいつも優しくかった。誠を庇って、自分が夫に怒られたりしても、いつも後で、義秀のいない所で、慰めたりしてくれた。そんな態度を、父から、甘いと叱責されることも少なくなかった。初めて、東商の推薦の話を持ち出した時も、

「誠がそうしたいのなら」と、母は言ってくれた。

しかし義秀に、

「お前は甘い」となじられると、気の弱い母は、何も言えなくなっってしまった。父に強く言われれば、母はそれ以上反対する事はできない。そんな母に、頼りなさやもどかしさを感じた事も、無かったわけではないが、それ以上に、家族が自分の意見に従って当然。と思っているかのような父の態度に、いつも怒りを感じていた。そして、そんな父に逆らえない自分自身にも。

母の事は好きだ。でも。

援護は、期待できないな。一瞬胸の内で呟いた後で、思い直す。

いや、それでいい。自分の力だけで、父を説得すると、心に決めたのだ。だからこそ、青木の申し出だって断ったのだ。

「父さん、今日も遅い？」

「今日は、特に何も連絡ないら、九時ごろには帰ってくるんじゃない？ お父さんに何か、用があるの？」

「うん、ちょっと」

「……そう」

一瞬、間があった。しかし、それ以上は何も言って来なかった。美奈子なりに、何か察したのだろうか。でも、それは今の自分には関係ない。あくまでも一対一で、父を説得するのだ。

部屋に戻った誠は、いつものようにすぐには風呂場に向かわず、グローブの手入れをした。ローションをしみこませた布で満遍なく汚れを落として、薄くオイルを塗りよく馴染ませた後で、ボールの中に挟んで伸縮性のある専用のベルトで固定する。いつもより、少しだけオイルの匂いが強めなグローブの匂いを、ゆっくりと鼻から吸い込み、野球への想いを再確認する。

今日こそは、必ず父に自分の思いをぶつけるのだ。皆の前でも、東商に行くと言言した。もう、後へは引けない、逃げるわけには行かない、負けるわけには行かない。

風呂場でシャワーを浴びながら、誠は東商からスカウトを受けた日の夜、父とその事について話し合ったときの事を思い出した。

「父さん、今日さ、東尾商業の監督から、うちで野球やらないかって誘われたんだ」

誠の言葉を聞いた義秀は、一瞬間を置いて、抑揚の無い声で言った。

「そうか、それで？」

表情は殆ど変わらないが、微かに威圧的な光が目にも宿る。

それで？ 聞かなくても、わかるだろう。俺は東商で野球がしたいんだ。わかってるくせに、どうしてそんな言い方をするんだ。そう思っている、口には出来ない自分の意気地の無さが、もどかしい、

歯痒い、情けない。

「……だめかな」

やっこの思いで、一言だけ搾り出した。

「駄目に決まってるだろう」

間髪入れずに、義秀に斬り捨てられた。威圧的な眼光が、さらに鋭くなり、誠を睨めつける。誠は、それ以上何も言えなかった。

「誠、学校は、何をしに行く所だ」

押し黙る誠に、義秀が追い討ちを掛ける。

これも、義秀が誠に、“学校は勉強をするために行く所”と言いたいのは、明白だった。だけど義秀は、こういう時、自分の口からは決して言わず、誠に言わせるよう仕向けるのが常だった。義秀は、暴力を振るう事は無かったものの、言葉で徹底的に追い詰めて来る事が、多々あった。そのやり方が、誠に、どれ程の屈辱を与え、自身への不信感を募らせているのか、義秀は全く気付いていなかった。いや、気付こうともしていなかった。少なくとも、誠にはそう見えた。

「どうした誠。聞かれた事に、答えられないのか？」

義秀は、白々しく怪訝そうな表情を作り、誠に返答を迫る。誠がそれでも黙っていると、義秀は、これもまた白々しく大きなため息をついて、

「じゃあ、教えてやるよ。学校って言うのはな、勉強するために行く所なんだよ」と言った。

義秀は、こういう時、妙に芝居がかった口調になる。その言い回しも、誠は大嫌いだった。

「野球が好きだから、野球の強い学校へ行きたい。その気持ちは、俺にもわかる。でも、もうお前も、それだけじゃいけない年齢だろう」

嘘だ。何が“わかる”だ。あんたは、俺の野球への熱意を、ひとつも分かつちやいない。分かるうともしていない。いつだってあんたはそうだ。俺が何かに夢中になっても、それが自分にとって理解

の出来ないものだと、あからさまにけなすんだ。野球だけじゃない。保育園に通っていた頃、夢中になって見ていたテレビ番組の変身ヒーローや、小学校の頃、当時人気だったアニメキャラのカード収集に熱中したときも、どうせ大人になったら、こんなもの、見向きもしなくなるんだ、せつかく小遣いをやってるんだから、無駄遣いをするな、なんて言って、いつもバカにしていたくせに。

「お前の為に、言ってるんだぞ」

義秀が続ける。

その言葉を聞いた時、誠は奥歯をぎゅっと噛み締めた。

義秀がよく使う言葉の中でも、最も嫌いな言葉だった。

本当に俺の為なのか？自分の為じゃないのか？俺を自分の理想通りの人間に造り上げて、自分が満足したいだけなんじゃないのか？義秀は、いつも一方的だった。誠の側に、歩み寄るようなことは考えていない、自分の側に一方的に、誠を引っ張り込むことによって、距離を縮めようとするのだ。

義秀は、誠が自分の意見に異議を申し立てて、口論になると、例え誠が筋道を立てた主張をしても「お前は、まだ若いから、そんな風にしか考えられないんだ」とか、「お前も親になれば、俺の気持ちがわかる」等と言って、決して誠の主張を受け入れようとはしなかった。

自分は大人であり、親である。だから子供である誠より、物事の道理を深く理解しており、より正しい道を導き出す事ができる。だから誠は、自分に言う事に従う事が、当然である。そんな傲慢さが、義秀の一挙手一投足に、ありありと見える。

大人だからなんだ。親だからなんだ。歳をとれば、何でもわかるのか。あんたが俺に示す道が、必ず成功に繋がっていると、あんたは保障できるのか。あんたの言う通りにして、上手くいかなかった時、俺が後悔した時、あんたは何を保障してくれるって言うんだ。あんたの為に失われた時間を、傷つけられた自尊心を、あんたはどうしてくれるんだ。

誠はいつも、そう思っていた。しかし、その気持ちを父にぶつける事ができなかった。そんな自分の弱さが、父の傲慢さに許せなかった。それなのに、

「もう一度、しっかり考えてみる。自分の将来のために、どうするのがベストなのか。もう子供じゃないんだから、それくらいわかるだろう」

子供じゃない？いつもは、お前なんてまだ子供だって、馬鹿にしてるくせに。一体、あんたの中で、俺は子供なのか大人なのか、どっちなんだよ。そのときの都合で、大人扱いしたり、子ども扱いしたり、どこまで身勝手なんだ。胸の内で父を罵倒する自分が惨めだった。

「そんな話、俺は絶対に認めないぞ。何の為に、高い月謝を払って塾にも行かせてやったと思ってるんだ」

行かせてやった？誠が、自分から塾へ行きたいなどと言った事は一度も無い。それなのに、あんたは、行かせて“やった”と思っているのか。怒りの中に、呆れが混じる。

「もう一度言うぞ。俺はそんなの絶対許さない。わかったな」

寝室へ向かう父の後姿を、黙って見送る事しか出来なかった時の屈辱が蘇って来る。あんな思いは、二度としたくない。

今度は負けない。父にも、自分自身にも、絶対に負けられない。父よ、勝負だ。

自室の勉強机で、数学の問題集を解いていた宮田英治は、一区切り付いたところで問題集を閉じて、数分前に母が持つて来てくれた、アイスコーヒーの入ったグラスを手に取り、ストローを口に咥えた。グラスの中で、溶けかけた氷がカランと音を立て、水滴が一滴、机の上に落ちた。英治は、咥えたストローからは口を離さずに、指先でなぞるようにして、机に落ちた雫をふき取った。放っておいても、すぐに乾いてしまいうだろうが、性格的に放っておけないのだ。

そんな性格を人からは、几帳面だと言われる事もあれば、神経質だと言われる事もある。ただ、英治自信は、人が自分をどう評価しよう、あまり気にしないタイプだった。

人は人、自分は自分、みんな違って当たり前。人に干渉される事も、逆に干渉する事も、英治はあまり好まない。誰かに何かを相談したりする事も、滅多に無い。自分でも、個人主義な性格だと自覚している。それが悪い事だとは思わないが、そんな自分が今、ひどく気になっている男がいる。自分でも、こんなふうに、他人のことが気になるのは珍しいとわかっているから、少し驚いている。

男の名は、井岡誠。野球部のチームメイトだ。

東尾中野球部の一番シヨート。自分と同じく、東尾商業野球部監督、西崎俊雄の誘いを受けた男だ。自分はそれを断ったが、井岡は東商入りを望んでいる。しかし、父の猛反対に遭い、悩んでいた。今日登校時に、偶然会った時も、井岡の幼馴染でもある野球部主将で、同じく西崎の誘いを受け、すでに東商行きの決心を固めているという小川佑介も交えて、その話をして、井岡が、心から真剣に悩んでいると感じた。

英治は、西崎の誘いを初めから断るつもりだった。野球は好きだけど、本気で、現実的な目標として甲子園出場を狙うような環境に身を投じて、そこに自分が馴染めるとは思えなかった。

学生の本分はあくまでも勉強だ、などという決まり文句に、迎合するつもりはさらさら無かったが、かと言って、部活を最優先した進路選択をするという発想は、全く無かった。

東商への推薦を断り、公立高校を受験すると決めたのは、百パーセント自分の意思だ。誰かに、相談もしなかった。そもそも、その道を選ぶのに、殆ど迷いなどなかったから、誰かに相談しようとも思わなかった。両親も、反対はしなかった。

自分は今までに、あれほど深刻な悩みを抱えた事は、無い。

子供の頃から、要領がいいとよく言われた。勉強も、スポーツも、それほど必死に取り組んで来たわけではなかったが、何をやっても平均以上の能力を発揮できた。友人が多いタイプではないが、かと言って周囲から孤立しているわけではないし、異性からの人気も決して悪くはない。比較的裕福な家で生まれ育ち、家族との関係も良好だ。

どれも、強く望んで手にしたものではない。学校の成績や、野球の技術に関しては、人並みに努力もしたが、それもあくまで“人並み”だ。

勉強、スポーツ、人間関係、家庭環境、英治がそれほど高望みをしなくても、どれも十分に満たされていた。だけど、そのどれか一つさえ、どんなに望んでも、決して手に入らない境遇に生まれた者もある。井岡の場合は、家族関係に悩んでいるということになるだろう。

教師をしているという、井岡の父。井岡の話からすると、かなり厳格な父なのだろう。

英治は井岡に対して、“そつが無い様で、どこか不器用”という、少々矛盾した印象を持っている。

勉強も結構できる。野球も東商からスカウトされるほどの実力がある。なのに、どこか危うい。同じクラスになった事が無いので、殆ど部活のみの付き合いだったのが、二年間一緒に野球をしていても、井岡の不器用さを感じたことは、少なくなかった。

不器用といっても、技術的なことではない。むしろ技術的な面で言えば、井岡ほど器用な選手はいないと思う。ショートでの堅実な守備は勿論、バッターとしても、ミートの正確さは野球部の誰もが認めるところだ。バントなどの小技も上手い。

英治が感じている、井岡の不器用さとは、精神的な部分だった。

英治は、野球部顧問青木健二の指示で、井岡がピッチャーをやらされた時の事を思い出した。英治達の学年には、エースを務める英治以外の投手がいまひとつ頼りなかった為、去年の秋、一学年上の先輩達が引退し、新チームが発足した直後に、野手の中から投手が出来そうな者を、青木が何人か試したのだ。井岡も、その内の一人だった。適任だと思った。井岡は肩もそこそこだし、何よりコントロールが良い。多少無理な姿勢からでも、悪送球は滅多にしない。

実際、紅白戦で初登板を果たした井岡投手は、青木が期待した通りの、安定したコントロールを見せ、立ち上がりは危なげなかった。しかし、結果的には打ち込まれた。原因は、アウトコース一辺倒の配球である事は、明白だった。キャッチャーが、そんな単調なリードをしたわけではないだろうし、井岡自身も、インコースを狙って投げたボールが無かったわけではないだろう。だが、優しい性格の井岡は、インコースを狙っても、無意識にデッドボールを恐れる気持ちで働いてしまい、ボールが真ん中寄りにいつてしまったのだ。気持ちに迷いがあれば、しっかりと腕を振り切ってキレのあるボールを投げる事はできない。小学生時代からピッチャー一筋の英治は、その事をよく知っている。

甘く入った棒球を、次々に打ち込まれた井岡は、自ら青木に降板を申し入れ、結局ピッチャーも辞退したのだった。

その井岡が、厳格な父の意向に、断固として立ち向かおうとしている。朝会った時には、まだ、はっきりと迷いが感じられた。だが、午後になって、部活で顔を合わせた時の井岡は、別人の様にふっ切れていた。少なくとも、英治にはそう見えた。もしかしたら、一心不乱に不安を打ち消そうと、もがいていただけなのかもしれない。

だが結果的に、井岡は、英治の決め球であるスライダーも、渾身のストリートも、迷いの無い鋭いスイングで、ほぼ完璧にバットで捉えた。井岡のバットに、今日ほど見事に自分の投球を捉えられた事は無かった。井岡は、その後守備でも、小川が打ち上げた際どい打球にダイビングキャッチを試みて、見事に捕球している。

練習後に、小川の勧めもあって、井岡は青木に、進路の事を相談しに行った。そして、はっきりと東商へ行くと、断言した。その時の井岡の、凜とした口調と表情が、無性に羨ましかった。そして、自分がそんな感情を抱いている事に、驚いた。深刻な悩みを抱えた事のない自分は、その辛さを知らない半面、逆にそこから抜け出したときの喜びも知らない。

人生山あり谷ありというが、その喩えで言えば、自分のこれまでの人生は、小高い丘が延々と続いているようなものだ、と、英治は思った。いつでも、周りの人より満たされていて、大きな転落は、今のところ一度も無い。言う事ないじゃないか。何が不満なんだ。

でも、そう思う一方で、不安定で起伏の激しい、けれど刺激的な人生に、少し憧れたりもする。それは、本当の苦難を知らない者の、贅沢な無いものねだりだろうか。

自分の感情が、小さくはあるけれど、しかししっかりと、確実に波打っているのを、英治は感じた。

井岡は、父を説得できるだろうか。

誰にでも優しく、人を傷つける事を嫌う井岡は、自分を含めた野球部員達からも好かれている。とりわけ井岡は後輩達から好かれていた。上下関係の厳しい体育会系において、井岡の様な存在は、些細な事でギクシャクしがちな中学生のチームの和を、さりげなく保ってくれる。井岡はいい奴だ。

出来れば、井岡の父には、息子の願いを聞き入れてやって欲しい。あの不器用な井岡が、あんなにはっきりと自分たちの前で、決意表明したのだ。その気持ちを、汲んでやって欲しい。

今日の井岡を見る限りでは、その決心は簡単には、揺らぎそうも

無い。だが英治は、あの時、マウンド上でうなだれて、自ら降板を申し入れた、井岡の脆さも知っているだけに、不安もあった。

らしくないな。他人の事を、こんなに気に掛けるなんて、でも——でも、中学生なんて、本来そんなものなのかもしれない。

大人と子供の境目の、どっちつかずな微妙な年頃。小さなことに、大きく揺れ動くのが当たり前じゃないか。そしてきつと、自分も例外ではないのだ。

「どっちみち、俺が心配したって、どうしようもないか」

波打つ感情を振り切るようにひとりごちて、英治は飲みかけのアイスコーヒーのグラスを手にとった。

グラスの中に半分ほど残っているアイスコーヒーは、すっかり氷が溶け切ってしまう、表層の部分だけ、殆ど水のようになってしまう。

英治はそれを、ストローで念入りにかき混ぜてから、少し躊躇したけれど、グラスに直接口をつけて一気に飲み干した。

ベッドに横になり、仰向けの姿勢から、ボールを天井へ向かって軽く投げる。手首のスナップを利かせて、指先でスピンを掛けて、ほぼ垂直に投げる。舞い上がった頂点で、一瞬静止するくらいのスピンを掛けるイメージで、投げる。落ちてきたボールを、グローブのポケットにしっかり収まるよう、注意しながらキャッチする。

考え事をする時、誠はいつも、この“一人キャッチボール”をすると、落ち着いてゆっくりと物を考えられるのだ。小学校高学年の頃、自然と身についた。

投げては捕り、捕っては投げ、集中力を高める。

風呂にも入った。夕食も済ませた。歯磨きもした。ついでに、少し散らかっていた、机の上も整理した。後はもう、父の帰りを待つだけだ。

大丈夫、自分がやろうとしていることは決して、間違っってなんかない。だけど――

では、父の考えは？

父が、自分に示している道は、間違っているのか？

亮平との会話を思い出す。

そんなに簡単に決めれる事じゃないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やり

たいからってだけで、あっさり決められるかよ

あの時、亮平の追求から逃れたいだけで、言ったわけではない。自分の中にも本音でそう思う気持ちがある。父の考えも、決して間違いないだろう。でも、今はそれを認めたくない。

東商で野球をしたいという自分の気持ちを「将来の事を、何も考えていない」と罵る、父の考えを受け入れる事は、負けたことにな

るような気がするのだ。

何に対して負けなのかは、自分でもはっきりとは分からない。父の傲慢さなのか、それに抗えない自分の弱さなのか、学歴を重んじる社会の規範なのか、今の誠にはわからない。ただ、ここで負けたら、自分は絶対に後悔する。そしてもしそうになったら、それを義秀のせいにしてしまう。そうになったら、自分があまりにも惨めだ。自分の人生が、思い道りに行かない事を、誰かのせいにして引きずっていくなんて、あまりにも惨めじゃないか。

そうだ。俺が一番したいことは、東商で野球をすることじゃない。誠は今、確信した。

一番したいことは、自分の進むべき道を、断固として自分で決める事なのだ。誰のどんな反対があろうとも、それを貫き通す意志の強さが欲しいのだ。

お前、親の言いなりじゃん。

あの時は、何も言い返せなかった、弘之の言葉。でも、今は違う。親の言いなりになんてなるものか。自分の人生は自分のものだ。自分の未来は、自分の意思で、自分の力で、勝ち取るのだ。

どんなに厳しい言葉を投げつけられても、どんなに激しい叱責を受けようとも、今日の俺は、絶対に怯まない。退かない。負けない。だから……、

覚悟はもう決まっている。父よ、早く帰って来い。

義秀は、美奈子の言った通り、九時過ぎに帰ってきた。誠は息を潜めて、扉越しに聞こえてくる、両親が交わす言葉に、耳をすました。

義秀は、いつものように、まずは夕食を済ませ、それから風呂に入って寝るつもりようだ。

誠は、どのタイミングで、父に話を切り出そうか考えた。その結果、義秀が、食事も風呂も済ませ、もう寝るだけ、というタイミングがベストだろうと、誠は考えた。義秀に、「食事中だから」とか「もう風呂に入るから」といった、話を途中で切り上げる口実を与えないためだ。

「ごちそうさま」という、義秀の声が聞こえた。おそらく、そう時間をおかずに、義秀は風呂場へ向かうはずだ。

誠の予想通り、義秀は食後すぐに、風呂場へ向かった。扉のすぐ向こうを、義秀のものとされる足音が、通り過ぎて行ったのだ。リビングから風呂場へ向かうには、誠の部屋の前を通らなければならないから、今聞こえた足音が、義秀が風呂場へ向かうものだったのだろう。

時計を見ると、午後十時を少し回っていた。

誠は、部屋の扉を開いて、リビングの食卓へ向かい、椅子に腰掛けた。

「どうしたの？怖い顔して」

「えっ？」

食器洗いの手を止めて、美奈子が尋ねた。母にそういわれて、誠は初めて、自分の顔が強張っている事に気づいた。だけど誠は、母の不意の問いかけに、思わず緩んだ顔を、もう一度引き締めた。隠す必要は、無いと思った。

「ちよっと、父さんに、話があるんだ」

「そう……」

それだけ言って、美奈子はまた食器洗いに取り掛かった。

台所で、食器を洗う母の背中を見つめながら、誠は、考えた。

母さんは、俺が何を話そうとしているのか、聞こうとしなかった。たいした話ではないと思ったのだろうか、それとも、大切な話だときづいているからこそ、あえて深く追求しなかったのだろうか。母の背中からは、察する事はできない。そう思って、誠が美奈子から目を逸らしたとき、食器を洗い終えた美奈子が、声を掛けた。

「何か、冷たいものでも飲む？」

「うん」

話し合いの前に、喉を潤しておく事は大切かもしれない。

「オレンジジュースでいい？」

「うん」

美奈子が、氷の入ったグラスに、オレンジジュースを注いだ。誠は、それを一気に飲み干した。自分でも気づかないうちに、喉が渴いていたらしい。

「おかわりは？」と、美奈子。

「ん、もう大丈夫」

「そう」

美奈子が、冷蔵庫に、ジュースをしまった。

誠は、グラスの中に残った氷を、口に含んで噛み砕いた。甘ったるいオレンジジュースより、こっちのほうが、今の自分の喉には、いいような気がする。

美奈子が、テレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。特に見たい番組があったわけではないらしく、無作為にチャンネルを切り替え、スポーツニュースで、野球情報が流れているのに気づき、手を止めた。

「見る？」

「あ、うん」

メジャーリーグでプレーする、日本人選手の活躍が、ダイジェス

トで紹介されている。鍛え抜かれた身体と、洗練された技術で、夢を掴んだ男達。彼らは、野球を続ける事を、親に反対されたりはしなかったのだろうか。それとも、彼らは子供の頃から、親までもが、その将来に夢を膨らませるような、圧倒的な才能を見せ付けていたのだろうか。

自分は、どうだろう。小学生時代も、五年生から、ショートのレギュラーを任されていたし、中学でも一年からサードのレギュラーで、辰弥の引退後は、ショート。打者としても、小中通して、主に一番を打ち、リードオフマンを務めてきた。それなりに実績を残したのかもしれないが、自分より明らかに上手いと思える選手も、試合などで何人も見てきた。客観的に見て、自分が傑出した才能を持っているとは思えない。だけど、それと、自分が東商で野球をするのとは、全く別の話だ。

自分には、東商で野球をする資格がある。たとえば、芽が出ず、三年間ベンチ入りする事すら出来なかったとしても、ここで父の意思に押し切られて、行きたくもない学校へ行かされるよりはましなはずだ。結果が全てじゃない。

「野球、好きなんだね」

母の声に、はっとした。

「すっごい、真剣な顔で見てた」

「いや……別に」

また、知らず知らずのうちに、顔が強張ってのを、母は勘違いしたようだ。

「野球、続けたい？」

「……うん」

「……そうだね、せっかく強い学校から誘われたんだもんね」

「うん、でも、やっぱり好きなことばかりじゃないかと思うし……」

だからと言って、父の意見に従う気は無い。だが、母が、自分と父が衝突する事を心配しているのだとしたら。もし、これから、自

分と夫が、口論する場面を目の当たりにして、母がそれを悲しんだら。

今日こそ揺るがないと思っていた決意が、ここへ来てわずかに揺らいだ。

義秀は、まだ、風呂から上がってこない。

「母さんは、どう思う？」

今度は、誠が逆に、美奈子に尋ねた。

「進路の事？」

「うん」

「うーん、どっちかなあ。自分の好きな学校へ行って欲しいとも思うけど、お父さんの言うとおりで、堅実な道を選んで欲しいとも思う。優柔不断かもしれないけど、どっちかっていうふうに言い切ることは出来ないな」

美奈子は、義秀のように、誠に何かを強要することは決して無いけれど、こちらが意見を求めたときにも、はっきりとした答えが帰ってこないことが多い。優しいと言えば優しいが、頼りないといえは頼りない。

「ごめんね、はっきりしなくて」

誠の胸の内を、見透かしたかのように、美奈子が言った。

頼りないかもしれないけれど、母は確かに、自分のことを想っていてくれている。頭から見下して、自分の理想を押し付けて、それを「お前のため」などと言う父とは違う。

「別に謝らなくていいよ。自分の事だもん。自分で何とかするよ」

「そう……」と言って、美奈子は微笑んだが、その笑顔の目にだけは、微かな悲しみが宿っているように、誠には見えた。

息子が、精神に自立しようとしている、その成長を喜びながらも、力になってやれない自分を恥じているのだろうか。

「父さん、遅いね」

そういつて、誠は、風呂場の方に顔を向けた。母の顔から目を逸らす口実が欲しかった。

「そういえばさ……」

誠は、ふと思い出した。

「昨日、父さん帰ってきた時、部屋の扉越しにちょっと聞こえたんだけど、父さん、俺になんか言おうとしてなかった？」

「えっ？ ああ、そう言えば、でも、もう寝ちゃったって言ったら、それ以上何も言わなかったから、何の用だったかはわからなかったけど。お父さんも酔ってたみたいだから、あの後お風呂入って、すぐ寝ちゃったし」

「そう」

自分が神経質になりすぎていたのだろうか。

その時、風呂場の扉が、開く音が聞こえた。義秀が、風呂から上がったのだ。

いいよだ。

母との会話で、少し決意は揺らいでいたけど、もうわずかな迷いは吹っ切れていた。

大丈夫、やれる、そう簡単に、今の俺の決意は揺るがない。

「母さん」

「何？」

「出来れば、二人だけで話したいんだ」

「……わかった、頑張ってるね」

美奈子はそう言って、微笑んだ。その目からは、先刻の見たような悲しみは感じられなかった。

美奈子が寝室へ入り、扉を閉じたのとほぼ同時に、義秀の足音が聞こえてきた。

「なんだ、起きてたのか」

風呂から上がったばかりの義秀は、タオルで髪を拭きながら、言った。

「父さん」

「どうした？」

「あのさ……ちょっと、話があるんだけど」

「何だ、改まって」

そう言いながら、義秀は、誠の向かい側の椅子に、腰を下ろした。

「母さんはどうしたんだ？まだ風呂にも入ってなかっただろう」

父の質問には答えぬまま、小さく息を吸って、誠は言った。

「俺……、どうしても東商で野球がしたいんだ」

あの日から、ずっと言いたかった、言いたくても言えなかった言葉を、父に告げた。

義秀の表情が、一瞬硬直する。驚いているように見えた。誠が未だに野球への未練を引きずっている事など、予想もしていなかったかのようだった。少なくとも誠には、そう見えた。

「何を言ってるんだ、お前は？」

「俺は、東商で野球がしたい」

もう一度言った。

義秀が、二、三度目をしばたかせた。

「今さら何を言ってるんだ。前にも話しただろう。高校へ行ったら勉強に専念して、野球はやめるって、俺と約束しただろう。もう忘れたのか？」

義秀は、呆れ気味に言った。だけど、こちらもはじめから、義秀がすんなりと聞き入れてくるとは思っていない。ここで怯んではない。黙るな。言い返せ。相手に飲まれるな。

「……違う」

父の目を真っ直ぐに見据えて、誠は静かに、しかしはっきりと、そう言った。

「違う？何が違うんだ？あの時、お前の為にも一般受験する方が良いんだって事を話して、それで、お前だって納得したんだろう」

「俺は納得なんてしてない。俺は約束なんかしてない。父さんが、勝手にそう思い込んでるだけだ」

自分の言葉が、自分自身を興奮させ、語調が荒くなる。誠の義秀の目を見る視線は、殆ど睨むようなものになったいた。

「だったら、どうしてあの時、最後に何も言わなかったんだ。何も言わなかったら、わからないだろう」

わからない？本当にわからなかったのか？あの時の俺の態度を見て、自分の言葉に納得したのだと、この父は本気でそう思っているのか？独りよがりな理屈を押し付けて、一方的に話を切り上げたという事を、全く自覚していなかったのか。

違う。本当は、わかっているのだ。今回の、進路の事だけじゃない。いつもそうだった。誠が何も言い返せなくなるまで徹底的に捻じ伏せて、“正しいのは自分”という形を作る事で、義秀は誠を、支配してきたのだ。憎い。父の傲慢さが、心の底から憎い。

誠は、自分の腹の底から、怒りが込み上げてくるのを感じた。いつもは、こういう攻撃的な感情は、いつもは抑制し、胸の内に仕舞い込んでしまっていた。ぶつけたくても、ぶつける勇気がなかった。だけど、今日は、違う。覚悟は決まっている。抑えない。抑えられないのではなく、あえて抑えない。

「じゃあ、あの時、俺が何か言ったら、父さんは聞く耳を持ってくれたのかよ。いつもいつも、自分の言う事一方的に押し付けてばかりで、俺の言うことになんて聞く耳持たないくせに」

ぶつけた。幼い頃から、胸の奥で燻らせていた思いを、初めて、はっきりと、父にぶつけた。かつて、父にこれほど強い口調で、言葉をぶつけたことは無かった。

「どうしたんだ、誠？何をそんなに、怒ってるんだ」

義秀は、目を丸くした。本気で驚いているようだ。息子が、何故自分に対してこんなに怒りをぶつけてくるのか、理解できていないのだろうか。

鈍い。鈍すぎる。

自分を正しいと信じきっている、傲慢さのなせる業だ。

自分は正しい。だから、息子が自分に従うのも当然だ。きっと、いつだって父はそう思っているのだ。今までは、そんな父に、黙って従ってきた。従うしかなかった。逆らえなかった。だけど、今回は違う。

退くものか。諦めるものか。絶対に、父に自分の意思を認めさせてやるのだ。

「別に、どうもしないよ。俺は東商へ行って野球をやる。ずっとそう決めてた。それを言いたかっただけ」

今度は、感情を抑えて冷静に言った。それが当然であるかのよう。そうだ。当然なのだ。自分の進路を、自分の意志で決める。自分がやるうとしていることは、至極当然の事なのだ。

「お前、今更何を言ってるんだ？」

義秀は、眉間にしわを寄せ、呆れたように言った。驚きが、怒りと侮蔑に切り替わるまで、そう時間は掛からなかったようだ。

「俺は、東商で野球をする」

父の目を真っ直ぐに見て、もう一度、はっきりと、自分の思いを口にした。

「はぁ……」

義秀は、わざとらしいほど大げさな溜息をついた。よくあることだ、この程度の事で、今日の誠の心は、折れたりはしない。

「それで？その後はどうするんだ？まさかプロ野球選手になるなんて言い出すつもりじゃないだろうな？」

予想外の言葉だった。一瞬、言葉に詰まる。

誠が、今思っている事は、あくまで東商で甲子園を目指して野球がしたいという事だけだ。でも、もしかしたら、プロ野球選手にも、

なれるかもしれない。そんな気持ちが無いわけではない。だが、それは決して現実的な目標ではなく、淡い夢のようなものだった。だけど――

それを、父に一方的に否定されるのは、納得できない。

「簡単になれるとは思ってない。でも、もしかしたら、なれるかもしれない。そのために、少しでも高いレベルで野球がしたいんだ」
「なれなかったら？」

義秀は、断定的な言い方はしなかったが、その口調には、そんな事出来っこないと言う嘲りが、はっきりと込められていた。

「そこまで先のことは、まだ考えていない」

「はあ……、もう、呆れて何も言えないな」

義秀は、もう一度大きな溜息をつき、吐き捨てるように言った。

こんな事を言えば、義秀が呆れるのはわかりきっていた。でも、それが、今の誠の正直な気持ちだった。まだ中学生の自分に、高校を卒業した後の自分がどうなっているかなんて、見当も付かない。それが、悪い事だなんて、少しも思わない。

「前にも言っただろう、もう子供じゃないんだから、もっと自分の将来の事を考えろって。部活のためなんかに、学校選んでどうするそれで、怪我でもして、野球ができなくなったらどうするんだ。自分の将来っていうのはな、楽しいとか楽しくないとか、そんなことで選ぶもんじゃないんだよ。どうしたら、将来安定した生活が出来るか、それが一番大事なんだよ。それぐらいわかるだろう」

「じゃあ、俺が東商に行ったら、将来安定して生活は出来ないの？」
先の事なんて、誰にもわからない。それは大人も子供も同じじゃないか。東商へ行くという選択が、誠の将来にマイナスになると、今の時点で断言することなんて、誰にも出来ない。出来るはずがない。

「確率の問題だよ。安定した将来を考えろと言ってるだろう。叶うかどうかかわからないような夢を見て成功する確率と、素直に俺の言う通りにして、堅実な道を選んで、大学へ行って、収入の安定した

仕事に就ける確率。どっちが現実か、そのくらいわかるだろう」

義秀はそうまくし立てて、自分の言っている事に反論が出来るか、とでもい言いたげに、誠の目を真っ直ぐに見てきた。誠は、視線を逸らさなかった。

何なんだよ、その偉そうな態度は。“素直に”だって？あんたが俺に求めているのは、“素直”じゃなくて“従順”だろう。あんたの言う事聞いてりゃ、何もかも上手くいくみたいな顔しやがって。

「どうだ誠？どっちが現実だ？」

義秀が、重ねて問う。またそれか。

「自分の言ってる事のほうが正しいって、俺に言わせたいんだろう。だったら最初から自分の口で、そう言えればいいだろう。何でいちいち、そんな勿体つけた聞き方するんだよ」

「お前が、何も分かっていないからだろう」

「だったら、あんたはどうなんだよ？」

何もわかってないだって？だったら、あんたは、自分は何もかもわかっているとでも言うのか？そんな人間、いるはずが無い。自分は絶対に正しいだなんて思っている奴こそ、何もわかってない奴だ。確信した。父は間違っている。

「あんたは何でもわかるのかよ？俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障できるのかよ？」

「誠、お前、さっきから誰に向かって口を利いてるんだ」

義秀は、ゆっくりと、威圧するような口調でそう言った。誠は、怯むことなく答えた。

「父さんに言ってるんだよ。他に誰がいるってんだよ」

当たり前だろう。ここには、あんたと俺しかいないじゃないか。わかりきった事を聞くな。

「いい加減にしろ！」

義秀が、怒鳴った。それでも、誠は怯まなかった。

「俺が聞いたことに答えろよ。そんなでかい声だしたって、誤魔化されないからな」

いいぞ。ここまで、一步も退かずに、父と渡り合えている。やれば出来るじゃないか。

「自分の言ってる事が、絶対に正しいなんて言い切れるのかよ？もし、あんたの言う通りにして、上手いかなかったとき、どう責任取ってくれるんだよ。出来ないだろ？だったら、そんなふうになんかんでも、自分の言う通りにさせようとするなよ。俺は……」

誠が、言いかけた時、寢室の扉が小さく開いて、美奈子が心配そうな顔がのぞいた。

「母さん……」

「美奈子、ちょっと」

義秀は、そういつて、空いた椅子を指差し、美奈子をそこへ座るように促した。美奈子が、黙ってそれに従う。

「誠はどうしても、俺の言う事を無視して、野球を続けたいそうだ。お前、どう思う？」

義秀は、少し済ましたような微笑を浮かべながら、美奈子に尋ねた。初めから相手の回答を制限する、いつもの威圧的な口調だった。「母さんは、関係ないだろ」

母の真意はわからない。ただ、父に強く迫られれば、母は自分の意思とは関係なく、父に賛同する態度を見せるだろう。そうなれば、父はさらに勢いづく事は目に見えている。そしておそらく、父の狙いが、そこにあるだろうということも。

「関係ない事はないだろう。母さんにとっても、お前の将来は大切な事なんだぞ。どうなんだ、美奈子」

「あたしは……、誠自身の進路なんだし、本人の行きたい学校へ……」

美奈子が言い終わらないうちに、義秀が口を挟む。

「お前まで、何を言ってるんだ。どうしてもっと先のことまで考えないんだ。そうやって、お前が甘やかすから、誠が、こんな勝手な事を言い出すんだ」

義秀が、声を荒げる。美奈子は萎縮して、押し黙ってしまった。

自分から、質問をしておいて、相手の言葉に割り込んでくる。これも義秀がよくやることだった。会話をしているも、相手の意見を聞き入れる姿勢など、頭から無い。自分の考えを、相手に一方的に押し付けるためだけの、コミュニケーションしか出来ない。だから、こんな事ができるのだ。

父への怒りが胸の奥で、さらに激しく燃え上がる。それを、ぶつ

けてやりたい。いままでは、威圧的な父に萎縮して出来なかったけれど、今日は出来た。今また、父にこの勘定をぶつけてやりたい。だけど、母が介入してきた事で、状況が変わってしまった。

これ以上、自分が父に抗えば、父の怒りが母に受けられてしまう。いや、すでにその矛先は、母の喉元に突きつけられている。それに母自身、息子と夫が、これ以上言い争うのを見ているのは辛いだろう。

加勢はしてくれないけれど、誠が誠でいることを、いつも受け入れてくれた母を、これ以上苦しめたくないという思いが、固まっていたはずの決意を激しく揺さぶる。

今日も、ダメなのか。また父の思い通りになってしまうのか。嫌だ。

お前、親の言いなりじゃん。

弘之の声が、頭の中に響く。

違う。俺は、親父に屈したわけじゃない。父の言っている事を、認めたつもりも無い。でも、母さんを、これ以上苦しめたくないだけなんだ。

「誠、どうだ。これだけ言っても、まだ俺のいうことがわからないか」

義秀が、誠のほうに向き直った。

誠は、俯いて視線を、逸らしてしまった。

目を逸らすな。黙り込むな。今日の練習だって、積極的なバッティングが成功したじゃないか。守備だってそうだっただろう。あの時の気持ちを思い出せ。攻めろ。退くな。相手に飲まれるな。でも――

俯いた誠の視界の端に映る、母の悲しげな表情が、奮い立とうとする気持ちを押さえつける。

「もう、俺は寝るからな。二人とも、もう少し頭を冷やせ」

義秀は、そう言って立ち上がり、寝室へ向かった。

16 (前書き)

今回で、一つ目の山場が終わります。でも、お話はまだまだ続くので、今後も宜しく願います。

一方的に話を打ち切り、寝室向かう父の背中。あの時と同じだ。止めなきや。今ここで、父を止めなかったら、あの時と何も変わらないじゃないか。佑介達の前でも「絶対に東商へ行く」と、宣言したんじゃないか。

俯いた顔を上げて、父の背中に何か言おうと口を動かすが、声にならない。

顔を上げたその目に、困惑した母の顔が映った。それとほぼ同時に、母は気まずそうに顔を伏せてしまった。心が揺れる、決意が鈍る。だけど、今ここで父を引き止めなければ、絶対に後悔する。そう自分に言い聞かせ、沈みかけた気持ちを奮い立たせる。

「父さん！」

義秀が、面倒くさそうな顔で振り向いた。

「何だ。まだ何かあるのか？」

義秀は、げんなりとした表情で振り返った。

「いい加減にしろ！ 誠、お前、学費を払うのは誰だと思ってるんだ」「……それは……」

それを言われたら、何も言い返せない。だけど、親が子供の学費払うなんて当たり前じゃないか。それを引き合いに出して、自分の意見を押し通すなんて卑怯じゃないか。そう言ってやりたい。でも言いたくない。親が子供の学費を払うのが当たり前なら、子供はそれを、親に感謝するのだって当たり前だ。でも、納得できない。たとえ高い学費を払ってもらったとしても、行きたくもない学校へ無理やり行かされて、それを感謝する気にはなれない。だけど、それはやはり、甘えではないかとも思う。

「大丈夫だよ、誠」

義秀は、穏やかな笑みを浮かべながら、そう言った。笑ってる？ なぜ？

「お前はまだ若いから、そんなふうと思うんだ。大人になって、働くようになったら、若いうちに勉強しておいて良かったって思えるんだよ。そういうもんなんだ。みんなそうなんだよ」

父のその言葉を聞いた時、誠の中で張り詰めていたものが、ぷつりと切れた。

萎えた。心が折れた。

通じない。この人には、何を言っても、自分の気持ちは通じない。結果さえ良ければ、それでいい。そこへ辿り着くまでの過程は関係ない。この人は、そう思っているのだ。

がつくりとうなだれる誠に、義秀が追い討ちを掛けた。

「大丈夫だ、誠。父さんを信じろ」

やはり穏やかな笑みを浮かべて、義秀はそう言った。

信じろ？息子の真剣な想いを真っ向から否定しておきながら、自分を信じろだと？ふざけるな。怒りを通り越して、悲しくなってきた。

こんな男が、自分の父親なのか。この男は、俺のことを一体ないなんだと思っているのだろう。自分の“もの”だとも思っているのだろうか。そうとでも考えなければ、ここまで自分の“意思”を否定する理由がわからない。

自分のものだから、自分の思い通りにならなければ、許せないのだ。

義秀が、踵を返して寝室へ向かっていく背中に、もう一度声を掛ける気力は、誠には残されていなかった。たとえ気力が残っていたとしても、父の心を動かす事のできる言葉は、見つからなかっただろう。

自分の父に、心の底から失望した。もうこの男と、心を通わせる事は不可能だ。心を通わせてみようと思える気力すら、もう沸いて来ないだろう。

父の姿が、寝室に消えた。

「誠……」

母が、泣きそうな顔で、自分の名を呼んだ。

誠は、母の問いかけには応えず、立ち上がって自室へ向かった。母に、謝られたり、慰められたりすれば、なおさら惨めな気持ちになるような気がしたのだ。母もそれを察したのか、それ以上何も言っただけだった。

自分の部屋に入った誠は、電気も点けずに、倒れ込むようにベッドに突っ伏した。枕に顔を押し付け、声にならない叫びを漏らし、枕を何度も叩く。

説得できなかった。あれほど強い決意で望んだのに、説得できなかった。

何度言っても、父に自分の想いは伝わらないだろう。物事の考え方が、父と自分は根本的に違うのだ。

もう、このまま黙って、父の言う通りにするしかないのだろうか。

お前、親の言いなりじゃん。

お前、親の、言いなりじゃん。

言いなりじゃん――

言いなりじゃん――

言いなりじゃん――

弘之の言葉が、呪文のように頭の中で反芻される。頭を抱え込むようにして、耳を塞いでも、忌まわしい記憶からは逃れられない。違う。違う。俺は、父の言う事に納得なんてしていない。従う気もない。諦めきれない。だけど――
もう、どうしたらいいか、わからないんだ。

かつてない決意で望んだ、父との“決戦”に敗れてから一夜明け、井岡誠は、十五年の人生で、最も憂鬱な朝を迎えた。

食欲もあまりなかったが、かと言って朝食抜きで午前中の授業を乗り切れるほど、育ち盛りの体は、燃費がよろしくない。

ハイブリッドカーよろしく、人間の身体を外科手術で低燃費に改良できるほど医学が進歩したら、発展途上国の食糧難がどれほど改善されるだろう、などと馬鹿げた事を考えながら、香ばしく焼きあがったトーストをコーヒードリで流し込むようにして強引に胃袋へ詰め込む。

あほくさ。声には出さずに、胸の内で呟く。我ながら馬鹿馬鹿しいとは思うが、今は少しでも、沈んだ気持ちを誤魔化したかった。

朝食後の歯磨きを済ませて、制服に着替えた誠は、引きずりそうになる程重い足取りで、学校へ向かった。

野球部の仲間に、合わせる顔がない。

昨日、顧問の青木にまで後押しされて「絶対に東商へ行く」と、高らかに宣言したにもかかわらず、父を説得できなかった。

前にも一度、同じ話をした。その時も、断固として拒絶されたが、昨夜は、さらに決定的に拒絶された。

もう何を言っても、父に自分の想いは伝わらないと絶望させられるほど、頑なに拒まれた。

父の言うとおりに、野球を諦めて学業一本に絞った進路を選ぶ道しか、自分には残されていないのだろうか。

「誠」

佑介が、笑顔で声を掛けてくる。大人顔負けの体格と不釣り合いな丸顔で団子鼻の愛嬌のある顔で笑顔を見せられると、いつもは心が和むのだが、今朝に限って佑介の笑顔は、どんな恐ろしい凶器よりも暴力的に、誠の心を抉った。

「おじさんと、話しつけてきた？」

その質問が、誠の心の傷口を、さらに深く抉る。

「…ダメだった」

搾り出すように、誠は言った。出来れば、口にしたくなかった。その言葉を口にする事で、より鮮明に、自分の重いが、父に受け入れられなかったという現実を、突きつけられるような気がしたからだ。だけど、ずっと親身になって、弱気な自分を後押ししてくれた親友に、結果を報告しないわけにはいかない。

「マジで？おじさん、そこまで、お前が野球続けるの反対なの？」

「もう、反対なんて次元じゃねえよ。完全拒否。俺今まで、あそこまで親父に本気の相談した事なかったのに、完璧に否定された。もう、あのクソ親父に、何言っても無駄だよ。所詮、現実知らないガキが、夢見てるだけとしか思ってたねえんだよ。畜生、ふざけやがって」

顔をしかめて天を仰ぎながら、まくし立てるように吐き捨てる。自分でも、驚くほど愚痴っぽくなっている。さっきまで、言いたくもなかった事なのに、一言「ダメだった」と、話したこと事でたがが外れてしまったのか、堰を切ったように父への悪態が、口を突いて出た。

亮平から聞かされた、木田という男の事を思い出した。

いつも優しく、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴ってばっかで、なんか、かわいそうになっちゃってさ、

佑介が、自分を哀れんではないだろうかと思い、佑介の顔を覗き込んだ。

「そっかあ。教師だもんなあ、おじさん。やっぱり、勉強のほうが大事って事になっちゃうのかなあ」

そう言って、佑介も顔をしかめた。自分の事のように悔しがって

くれる友の心遣いを、素直に喜べない。同情されているようで、いたたまれない気持ちになる。二日前にも同じ事を感じた。そんな自分が、惨めで仕方ない。

きつと木田という男の父親も、義秀のような傲慢な男なのだろう。誠は、木田とその父親が、どんな男なのだろうかと思像してみた。

まずは息子から。コントロールの良い投手だが、よくも悪くも神経が細やかな、自分より少し年上の男。体型は、細身のような気がするが、身長は高めのような気がする。体格としては、英治と同じくらいか。その体の上に、おとなしそうなたれ目で、顎の尖ったやや面長な顔が、小ぢんまりと乗っかっているのが、目に浮かんだ。幼い頃から、父の特訓を受けていたという事だから、その顔はきつと日に焼けていただろう。野球をやめてからは、どうかかわからないが。

次に父親。体育会系出身で、息子に野球の猛特訓を課してきた中年男。義秀と同じ、威圧的な目が真っ先に目に浮かんだ。四角い顔に、短く刈り込んだ髪型。口をへの字に曲げて、息子を睨めつける姿が容易に想像できる。会った事もないくせに勝手な想像してをして、木田の父に怒りを覚える自分が、おかしい。体格は、息子と違ってがっしりしていそうなイメージだ。次に思い浮かんだのは、大きくて分厚い手。その手で、木田の父は、息子に暴力を振るうこともあったのだろうか。

木田はそんな父に、どこまで抗ったのだろう。どこで諦めてしまったのだろう。自分の意思を、自分の父親に一方的に捻じ曲げられた時、どれほど悔しかっただろう。どれほど惨めな気持ちだったのだろう。

自分もこのままだと、木田と同じ道を辿ってしまうかもしれない。このままじゃいけない。このまま、父の意思に押し切られたら、絶対に後悔する。だけど、あの様子では、とても説得できそうにない。もう、どうしたらいいのかわからない。

「誠、コンビ二行こうぜ」

「コンビニ？弁当持ってきてないの？」

特に用のない寄り道は、あまり好きではない。

「そうじゃねえけど、いいから行こうぜ」

佑介に押し切られ、誠は渋々コンビニの自動ドアをくぐった。

店内に入ると、季節感を無視したおでんの匂いが鼻をついた。冷房での効いた店内のレジカウンターの上で、もうもうと湯気を立てている什器から漂ってくるこの匂いが、誠は苦手だった。

コンビニでパートをしている母に、以前尋ねた事がある。

「今ってさ、一年通しておでんやってるコンビニ多いけど、真夏におでんなんか買う人なんているの？俺、冬とかならいいけど、夏とかにさ、冷房で冷たくなった空気がおでんくさいのって、なんか違和感あるんだよね」

「よその店はどうか知らないけど、うちの店はお昼頃になると、そこそこ出るわよ。勿論寒い時期に比べたら、売れないから作る量も少なめだけどね」

「夏の昼間におでんなんて、どんな人が買ってくるの？」

「年配のお客さんが多いかな？うちの店の近所は、結構多いみたいだし。一人、毎日のように買いに来るおばあちゃんがいるけど、その人は、ご主人が亡くなって、一人暮らしなの。それで、一人分の料理作っても効率悪いからって、よく買いに来てるわ。あたしも、最初は何も真夏にまで、熱々のおでん買わなくても、って思ってたんだけど、よく考えたら海の家なんかでもよくやってるし、その場で食べるならまだしも、店で買ったのを家に持って帰って食べる頃には、熱々ってことはないだろうしね」

そう言われてみれば、夏でもラーメンとかなら、熱々でも違和感無く食べれるな、と誠は思った。

目からウロコ、と言ったら言い過ぎだが、その話を聞いた時妙に腑に落ちて、自分の中で、少し物の見方が広くなった気がしたのを、誠は思い出した。かと言って、真夏におでんをつつく気にはなれなかったが。

固定観念、てやつか。

当てもなく店内をうろつきながら、口には出さずに呟いてみる。
自分は、固定観念には縛られない人間になりたい。父のように、自分の考えだけを正しいと信じ、それを他者にも押し付けるような人間にはなりたくない。広い視野で、物事を考えられる人間になりたい。

お前、親の言いなりじゃん。

弘之に、あの言葉を突きつけられてからずっと、それまで何の疑いも無く、大人から与えられた課題を自分がこなしていた事に違和感を感じていた。勉強が出来なくなつて、親の示す道ばかりを歩まなくなつて、充実した日々を過ごしている人も、きっと沢山いるはずだ。逆もまた然り。勉強が出来て、親の言う事になんでも従つてきても、その先に必ず、素晴らしい未来が待っているとは限らない。先のことは、誰にもわからないのだ。

自分がやろうとしていることは、決して間違つてなんかいない。父がなんと言おうと、その気持ちは変わらない。でも、自分がどれほど父の意思を拒絶しようとも、結果的に、父の示す道を進む事になったら、それは、父の考えを認めるのと同じ事じゃないだろうか。諦めたくない。自分は、自分の進むべき道すら、自分で決められないような、弱い人間なんかじゃない。でも、どうしたら……

「誠」

「佑介」

佑介が、商品の入ったビニール袋をぶら下げて、立っていた。

「お待たせ。買うもん無いなら、もう行こうぜ」

「ああ」

佑介と並んで、店の出口へ向かう途中、賞味期限切れが近づいた商品を、無造作に籠に放り込む店員の姿が目に入った。

「ああゆうのってさ、皆捨てちゃうんだろ？もったいねえよな」

佑介が、小声で言った。

「うん、うちの母さんが働いてる店なんかは、一応従業員が食べたり持ち帰ったりしてもいい事になってるみたいだけど、その分を引いても毎日必ず人籠分くらいは余るみたい。店によっては、食べさしてもくれない所もあるみたいだよ」

「じゃあ、そういう店は、残った食べ物は、全部ただのゴミになっちゃうんだ」

「そういうことだね」

自動ドアをくぐるとき、もう一度ちらりと、件の店員の方へ目をやると、すでに三つの籠が商品で一杯になっていた。

発展途上国なんかじゃ、自分よりずっと幼い子供が、何人も、ともに食べ物も与えられずに死んでいる。その境遇と比べたら、自分はどれほど恵まれているだろう。きっと、世界的に見れば、日本に生まれたという事だけでも、相当恵まれている部類に入るはずだ。そう考えると、自分が抱えている悩みが、とても贅沢な悩みのようにも思えてくる。

俺は、やはり甘えているんだろうか。このくらいの事、我慢して受け入れるべきなのかもしれない。

それが、自分の本心なのか、それとも自分を納得させる為に、必死で言い聞かせているだけなのか、誠自身にもまだわからなかった。

「誠、これ飲めよ」

そういつて、佑介が差し出したのは、茶色い小さなガラス瓶に入った、栄養ドリンクだった。

「結構効くぜ、それ」

「佑介……」

手渡されたガラス瓶を握り締めると、心地よい冷たさが、手のひらに伝わってきた。

これを買うために、佑介はわざわざコンビニに寄ったのだろうか。「先の事も大事かも知れないけどさ、俺達が、このチームで出れる最後の大会まで、もうちょつとしかないんだぜ。お前がそんなじや、勝てる試合も勝てねえだろ」

「ごめん、なんか、変に氣い遣わせちゃって……」

「いいよそんなの。それに、東商で野球やるつもりなら、今のうちから、これまで以上に頑張らなきゃ、ついていけないぜ」

まだ、自分が東商へ行きたいという気持ち、後押ししてくれるのか。嬉しかった。こいつと、これから先も、一緒に野球がしたいだけ……

いや、今はとりあえず、最後の大会に集中しよう。昨日の今日で、義秀に“再戦”を申し入れたところで、結果は同じだろう。それに、もしこのまま、本当に東商への道が断たれるとしたら、中学野球としてだけでなく、協議として取り組む野球も、この大会が最後という事になる。絶対に、悔いは残したくない。

「ありがとう、佑介。最後の大会、頑張ろうぜ」

「おう、やろうぜ」

誠は、ビンの蓋を開けて、ドリンクを一気に飲み干した。

「いい飲みっぷりだね」

後ろから声を掛けられて、振り向くと、英治がいた。

「おはよう、エーちゃん。俺、昨日、親父ともう一回話したんだけどさ、ダメだった」

聞かれる前に、先に言ってしまったほうが楽だと思い、誠はあえて、自分から昨日の事を、英治に話した。

「それで、佑介が、そのコンビニで、これ買ってくれたんだ」

飲み干した空き瓶を、顔の前でかざす。

「なる程ね、さすがキャプテン。いいところあるじゃん」

「まあね、最後の大会も近いし、主力メンバーがへこんでちゃ困るもんな」

「確かに、井岡の出塁率は、チームの得点に大きく影響するからね」
自分が、チームから必要とされている。その気持ちが嬉しかった。その気持ちに、結果で応えたい。

「大丈夫、正直まだ完全には立ち直れてないけど、部活の時間までには切り替えるから」

「しっかり頼むぜ、誠。昨日みたいに、バッティングも守備も期待してるぜ」

佑介が、誠の肩を叩く。

「俺も昨日は、ちょっとショックだったもん。井岡にあそこまで打ちまくられたの、多分はじめてだよね」

「ショック、受けてたようには見えなかったけど」

「確かに、翔太なんか掠りもしなかったし、俺ん時も、コントロールばっちりだったじゃん」

佑介が、誠に賛同する。

「ショックを受けても、それがピッチングに影響しないように、やせ我慢するのが、エースの務めだからね」

確かに、英治は試合中にピンチを迎えても、全く表情を変えない。投球だけでなく、自分のメンタルのコントロールも、抜群に上手いのだ。

誠は、メンタルのコントロールが、やや苦手だった。打ち損じた

り、エラーをすると、考え込んで消極的になってしまう。自分の精神面の弱さは、誠自身よく自覚していたし、自分にとって最大の課題とさえ言えた。

だが、昨夜――

結果的には、自分の主張が、父に受け入れられる事はなかったが、今までにないほど、父に自分の気持ちを激しくぶつけることが出来た事は、誠の中で、小さな自信にはなった。

昨日の練習でも、積極的な姿勢が結果に結びついた。

まだ諦めるのは早い。俺はやれる。俺はあんな親父に、絶対負けない。

そう自分に言い聞かせた。

20（前書き）

安西の学年を間違えていましたので、訂正しました。

県立水蘭高校二年G組の教室で、井岡義秀は世界史の授業を行っていた。

「安西、どこを向いてる。ちゃんと授業を聞いているのか」

義秀に名前を呼ばれた生徒、安西聡は、俯いた顔を上げて、表情の無い顔で一瞬ちらりと義秀の方に目を向けたが、すぐに顔を背け、窓の外の風景に目をやった。無造作に染められた金髪。その頭頂部の、生え際から伸びた黒い地毛の部分がかなり伸びて、ぽっかりと空いた大きな穴のように見える。

義秀も、なんとなく、つられるように窓の外を見た。

体育の授業で、サッカーをしている生徒達が、目に映った。窓が空いている事もあり、歓声や笑い声も、はつきりと聞こえてくる。

視線だけを安西の顔に戻してみると、いつもの気怠そうな表情で、外の風景を眺めたまま、ぼんやりと頬杖をついている。安西は、小中高と、スポーツとは無縁だったはずだ。おそらく今も、サッカーに興味があったのではなく、自分の視線を避けたくて、そっちを向いただけなのだろう。

安西は、昨年度は義秀が担任を勤めていた、一年E組の生徒だった。その頃から、すでに成績は留年ぎりぎりで、義秀も、何度も安西の補修授業に付き合った。

こちらの問いかけに、嫌気が差した時、虚ろな目で窓の外を見るのは、安西の癖だった。義秀は、去年の一学期に、二人きりで行った補修を思い出した。フランス革命についてだ。絶対王政の社会で、特権階級に虐げられてきた平民達が決起して起こした、この革命は、現代における民主主義の原点とも言われる。

「安西。今俺達が、民主主義の世の中で、独裁者に抑圧されずに生きていられるのは、こういう人たちが、命がけで戦ってくれたおかげなんだぞ。お前も成人したら、選挙には必ず行きなさい。せつか

く与えられた権利を、むざむざ放棄するのは、怠慢だ。これは、平和な時代に生まれた人間の義務だぞ」

「別に、俺がこいつらに革命起こしてくれて頼んだわけじゃないでしょ？俺政治とか興味ないし」

安西はこの時も、表情の全く無い顔で、そう答えたあと、虚ろな目で窓の向こうへ視線をやったのだ。

水蘭高校は、学区内ではトップクラスの進学校である。ここへ入学してくる者は、皆、中学時代までは、各中学でトップクラスの成績を収めてきた者ばかりだ。安西も例外ではない。

安西は水蘭の中では、下の下の劣等生だった。入学試験も、ぎりぎりでの合格だったと聞く。

“挫折に弱いエリート”などという言葉があるが、義秀は、安西にその言葉は当てはまらないような気がしていた。

義秀は、一年生の時も、安西のいたクラスで授業を受け持っていたが、安西は入学当初から、今と同じく、全く覇気の無い様子で、次第にクラス内でも孤立していった。

それから二年たった今も、安西は、当時と全く変わらぬ無気力さで、窓の外を眺めている。希望進路も、G組みの担任である後藤政信によると、一応四年生の大学という事になっているそうだが、今のままでは、よほど志望校のレベルを落とさない限り、合格できる大学は見つからないだろう。いや、それ以前に、こんな無気力なまま、大学に進学した所で、何の意味があるのだろうか。

義秀は、昨晚息子の誠に投げかけられた言葉を思い出した。

俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障できるのかよ？

大人しくて、素直だと思っていた息子が、あんなに感情を露にしないで、自分に食って掛かった事は、初めてだった。その真剣な眼差しには、少したじろぎもした。だが、自分の教育方針を帰る気は、毛

頭無かった。

息子に対しても、生徒に対しても、決して妥協はしない。子供達の意見を聞き入れていたら、きりが無い。子供の意見を尊重するなんていうのは、自分の教育理念に自信のない者たちの、逃げ口上だと、義秀は考えている。甘やかせば、子供は付け上がるだけだ。それでは本人の為にもならない。人生は、自の思い描いたとおりに運ぶほど、甘いものではない。人生経験の浅い若者に、現実の厳しさを教えてやるのが、大人の務めなのだ。

「安西、嫌な事から逃げ出したり、目を背けてばかりいたら、いつまでたっても成長できないぞ。もう、それぐらいわかる歳だろう」

安西が、目だけをこちらに向けた。先ほどまで何の感情も感じ取れなかった眼差しが、微かに攻撃的で尖ったものになったのを感じたが、義秀は、意に介さずに授業を続けた。

安西一人のために、授業時間を浪費すれば、他の生徒にも迷惑だ。だが、決して安西を、このまま見捨てたりするつもりはない。同僚の中には、ああいう奴は毎年必ず一人はいるから、放っておけばいい、などと言って傍観を決め込んでいる者もいるが、それは職務怠慢だ。

職務を全うするのが、社会人の義務。そして、一人前の社会人になるために、良い成績を取るべく努力するのが、学生の義務。それを教えるのが、われわれ教員の義務なのだ。

21 (前書き)

感想の受付を、ユーザー限定から、制限なしにしました。どんな事でも書き込んで下さい。

義秀は、海辺の小さな漁師町で育った。義秀の父、井岡忠雄も、その父も、そのまた父も、漁師だった。忠雄も当然、長男の義秀を、漁師にするつもりでいたし、義秀自身も、幼い頃にはそのつもりでいた。真面目で、勉強熱心だった義秀は、飲み込みも早く、義秀は、忠雄の期待を一身に受けていし、大漁旗をはためかせて、大海原へ繰り出す父の船は、誇らしくすらあった。だが――

中学生になり、自分の将来と言うものを真剣に考えるようになると、決して収入が安定して 事実、井岡家の経済事情は、決して恵まれていたとは言えなかった。そのくせ忠雄は、毎晩浴びるように酒を飲むものだから、家計は傾く一方で、両親が金の事で口論になることは、日常茶飯事だった。両親が、互いを口汚く罵りあう姿を見る度に、義秀は漁師と言う職業に不安を持つようになり、こんな家族は嫌だ、自分は、将来安定した仕事に就いて、家族に経済的な負担を掛けない過程を築きたいと、願うようになっていった。

だが、長男である自分が、漁師以外の職業に就く事など、父は決して許さないだろう。同級生同士で、将来について話し合っている時に、高校を卒業したらアパートを借りて大学へ通うなどと語って、目を輝かせている仲間達の話聞かされた時の、肩身の狭い気持ちは、今でも忘れられない。

大学へ通わせて貰うのは、さすがに厳しいかもしれないけど、せめて収入の安定した職業に就きたい。将来結婚して子供が生まれた時に、家族に経済的な負担を掛けたくない。そう思って、一度忠雄に、相談した事がある。

「父ちゃん、俺、漁師とは違う仕事がしたい。自然が相手だから仕方ないけど、やっぱり俺、将来はもっと、収入の安定した仕事に就きたいんだ」

「馬鹿野郎っ!」

晩酌中の忠雄は、赤くなり始めた顔をさらに赤くして、義秀を拳で思い切り殴りつけた。

「ふざけたこと言いやがって。俺の父ちゃんやじいちゃんが、ずっと守ってきた船を、お前はよその誰かにやっちまってもいいってのか？寝ぼけてたこと言ってやがると、張り倒すぞ、この野郎！」

忠雄は、気性の荒い漁師仲間の内でも、短気で知られた男で、口より先に手が出るタイプだった。そんな父に、漁師になりたくないなどと言えば、こうなる事は目に見えていた。だけど、言わずにいられなかった。

「俺だって、漁師の子供に生まれたくて生まれてきたわけじゃない！どうして俺の将来を勝手に……あっ！」

言い終わらないうちに、再び拳が飛んでくる。鼻からも口からも血が出ている。畳にこぼせば、母が気づいた時に心配させてしまう。それが発端になり、また夫婦喧嘩が始まってしまふ。自分のしたことが原因で、両親が争う姿を見たくない。そう思って、懸命に手で顔を抑えた。

「口答えるんじゃないやねえ！」

自分自身の言葉が、怒りに拍車を掛けた様子で、忠雄は何度も、何度も、義秀を殴り続けた。父に殴られたことは、今までに何度もあったけれど、この時ほど執拗に殴られたことは無かった。義秀は、頭を抱え込んで亀のように丸くなった姿で、恐怖と屈辱に耐えながら、何度も、何度も、自分に言い聞かせた。

俺は、こんな理屈の通じない人間には、絶対になりたくない。自分の思い通りにならないければ、暴力で人を捻じ伏せるなんて、絶対に間違っている。正しい人間になりたい。正しい事が、何故正しいのか、それを子供に言っただけで聞かせることの出来る大人になりたい。

教師と言う職業を志すようになったのは、その頃からだった。

高校卒業と同時に、家出同然で実家を飛び出した。生活費捻出のために、三つのアルバイトを掛け持ちし、その合間に、独学で受験勉強をして、二浪の末に合格した夜間主の大学を、六年掛けて卒業

した。生活費も、学費も、自力で賄っている自分より、親の脛を齧って通っている、自分より若い同級生が、先に卒業して就職しているのを見て、一人悔し涙を流した事もあった。

そんな劣等感に苛まれていた苦学生時代に、後に妻となる田口美奈子と出会った。必修教科の英会話で、同じクラスになったのだ。

しょっちゅう宿題を忘れてくる、あまり勉強熱心でないグループの一人だった。宿題を写させてやる代わりに、彼らに学食で昼食を奢ってもらう事が定番となり、親しくなったのだ。

宿題もやって来ないなんて、しかも人のものを写して提出するなんて、なんて自堕落な奴らだ。そう思って、義秀は当初彼らを、少なからず軽蔑していたが、貧乏学生にとって、昼食を似ただでありつけるのは捨てがたかったし、主管いっ忘れるたびに、自分を頼って「お願いします、井岡先生！」などと言って頭を下げて来る彼らが、教師を目指していたと言う事もあってか、どうにも憎めなくなってしまうていたのだ。

大学を卒業して教師になって三年目に、美奈子と結婚した。良くも悪くも大らかで、時にはそのアバウトさに呆れる事もあるけれど、一緒にいると肩の力を抜いてリラックスできる妻は、自分にとってかけがえの無い存在だ。さらに二年後に誠が生まれた。大人しくて、手の掛からない、心の優しい子に育ってくれた。

家業を継がなかったことを根に持っていて、結婚にもあまり言い顔をしていなかった忠雄も、誠が生まれてからと言うものの、事あるごとに「今度はいつ帰って来るんだ」などと言うようになり、誠を可愛がり、父とのわだかまりも、消えていった。

人より少し遠回りをしたかもしれない。だけど、後悔はしていない。人より苦勞をしたからこそ、当たり前前の事を幸せだと思える。

自分は幸せだ。そう思っていた。その気持ちだが、昨夜、息子の言葉によって、少し揺らいだ。

俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障でき

るのかよ？

いつも大人しくて温厚な息子が、怒りに満ちた目で、自分にそう言ったのだ。さすがにたじろいだ。

保障などは出来ない。ただ、自分は確率として、その方がリスクが少ないという事を、言いたかったのだ。

学生時代に、好きな事に精一杯打ち込んで、思い出を作っておく事は、素晴らしい事だと思う。自分は、部活動に取り組むことそのものを、否定しているわけではない。

事実、自分の教え子が、部活の試合で勝った報告をしてくれたりした時などは、心から嬉しかった。だけど、学生の本分は、あくまでも勉強だ。部活は、その合間に取り組むものであるべきだ。

いくら名門校から、誘われたからと言って、自分の学力レベルを大きく下回るような学校、へ息子が進学するなどと言う事は、断じて認められない。

自分も中学生の時に、自分の将来をめぐって、父と揉めた。もしかしたら、息子も今、あのときの自分と同じような気持ちなのかもしれない。

だけど、自分と父は違う。自分の言う事は現実的で、理にかなっている。今はわからなくても、将来はきっと、自分の気持ちをわかってくれるはずだ。

義秀は、そう信じていた。

東尾中学放課後のグラウンド。誠達野球部員は、夏の大会へ向けて本格化した練習に取り組み、汗を流していた。

ショートを守備位置に着き、青木のノックを受ける。ボテボテのゴロに、猛然とダッシュして打球を掬い上げ、前屈みの姿勢のままサイドハンドで一塁へ送球する。佑介がミットを構えた所に、一直線に送球が収まった。

「ナイスショート！」

顧問の青木健二の声も、次第に熱を帯びてきている。

誠達三年生にとって、二週間後に迫った夏の大会は、中学野球最後の公式戦になる。二年前は、主将・小松辰弥を中心とした、鉄壁の守備力で、県大会ベスト8入りを果たした。これは、東尾中の過去最高成績でもある。誠も主に、九番サードで出場している。去年は、三年生が比較的小粒だった事もあり、一番ショート井岡誠、二番セカンド菊池翔太、三番ピッチャー宮田英治、四番ファースト小川佑介というラインナップが、この時すでに定着していた。しかし、それは逆に、まだ成長過程の彼らを中心に据えなければならなかった、チームの地力の弱さの裏返しでもあり、最後までチームとして機能しないまま、結局地区予選で敗退した。

だが、今年は違う。下級生時代からレギュラーを任されて来た、実戦経験豊富なメンバーが、今年は揃っている。守備力で言えば、二年前のチームには、やや劣るが、絶対的エース、宮田英治の安定感を加味すれば、失点を防ぐ能力は決して引けを取るものではない。上位打線の破壊力は、明らかに現チームのほうが上だ。トータルで見れば鼻負目無しに、二年前のチームより、現チームの方が上だと、誠達は見ている。だからこそ、一年上の先輩達が引退して、新チームが発足した時、東尾中野球部発足以来となる、県大会優勝、つまり全国大会出場を目標に掲げたのだ。

父とは、ひとまず休戦だ。今はとにかく、目前に迫った、中学野球最後の大会に、全力を注ごう。もう一度、自分の野球への想いを確認するためにも。

「ショート！」

今度は、痛烈な打球が二遊間を襲った。間一髪、二塁キャンバス後方で打球をキャッチし、反時計回りに身体を反転させながら、その勢いを利用して、一塁ヘスナップスロー。体が軽い。こんなにも、自分のイメージ通りに体が動くなんて、初めてだ。

やれる。俺はやれる。県大会優勝も、甲子園も、決して夢なんかじゃない。自分の力に、自信がわいてくる。一度萎えた心に、力が漲って来る。

見てろよ親父、俺は絶対負けないからな。あんたにも、自分自身にも。

佑介のミットに、送球が収まる。今度も、佑介のミットは微動だにしなかった。

練習を終えて帰宅し、風呂と夕食を済ませた誠は、ベッドに寝そべり、いつものように一人キャッチボールをしながら、考えていた。最後の大会を戦い終えるまで、父を説得する事は、後回しにすることにした。中学生活、もしかしたら、野球人生最後の公式戦となるかもしれない大会に、悔いは残したくなかったからだ。

だが、悔いを残したくないのは、進路の問題も同じだ。後回しにしようと心に決めても、やはり頭の中から離れない。

もう一度、父と話し合ってみようか。いや、今は最後の大会に集中すると決めたじゃないか。それに、昨日の様子じゃ、今また父と話したって、結果は目に見えているだろう。でも、もしかしたら……

「はあ……」

誠はため息をついて、ボールを掴んだグローブを、スポーツバッグの中にしまった。

どうして俺は、こう優柔不断なんだろう。

一度固めたはずの気持ちだが、簡単に揺らいでしまう。やると決めた事を、やり通せない。

登校中に、佑介や英治と話をしていた時も、練習中も「今は、最後の大会に向けて、部活に集中する」と、心に決めていたはずだった。それなのに、帰宅して自室に一人していると、どうしても昨日の事を思い出してしまう。昨日もこうして、ベッドで一人キャッチボールをしながら、父を説得する事を考えていた。ずっと悩んでいたけど、仲間たちにも後押しされて、勇気を振り絞って、父に、自分の気持ちをぶつけた。しかし、その気持ちは、父に受け入れられなかった。

父の、傲慢さを、鈍さを、視野の狭さを、心の底から憎んだ。許せなかった。だけど、今自分が、この鬱屈とした気持ちから抜け出せずにいるのは、全て父のせいでできるものだろうか。やはり、も

つと自分自身が強い気持ちで、父に立ち向かっていたら、こんな事には、ならなかったのではないか。

昨夜、父を説得しようとする誠の気持ちが、最後の最後にぐらかせたのは、母の悲しげな表情だった。自分の夫と息子が、大声を出して口論をしていれば、心配にもなるだろう。だけど、そこで引いてしまった事は、果たして正しい判断だったのだろうか。

あの時「母をこれ以上悲しませない為に、これ以上父と言いつ争うのはよそう」と、誠は思った。だけどそれは自分の本心だっただろうか。自分が、父を説得できなかった事を、「母の為に」と言う方向に摩り替える事で、母のせいにする事で、逃げていたのではないだろうか。母を悲しませなくなかったという気持ちは、決して嘘ではない。だけど、その気持ちは、東商への思いを断ち切るほど、強いものだっただろうか。自分自身に、問いたです。

否定は、出来なかった。「母の為に、自分は気持ち緒抑えたんだ」と、自分に言い聞かせる事で、父を説得でいなかった自分の弱さから、目を逸らしていたのだ。

誠は昨夜、母に「父と二人だけで話したい」と言って、美奈子には、席を外してもらっていた。母が話し合いの場にいる事で、自分の気持ちを抑えてしまうかもしれない、自分の気持ちを伝えきれない事があるかもしれない、という不安があったのだ。結果的には、美奈子は耐え切れずに、二人の間に介入し、誠の気持ちは揺らいだ。あの時、母が話に入って来なければ、父を説得出来たかも知れない。自分が、父を説得できなかったのは、母のせいだ。そんなふうに思ってしまう気持ちが、心のどこかにあった。

俺は、自分の弱さを、母さんのせいにして誤魔化す為に、あそこであえて、父とこれ以上議論する事をやめたのか？

父だけでなく、母にまで責任転嫁をして、自分の弱さから目を背けている。そんな自分が、心底嫌になった。

もう嫌だ。こんな自分が、情けない。自己嫌悪から逃れるように、誠は部屋の明かりを消し、布団を頭からかぶって眠ろうとした。そ

れでも、その日はなかなか寝付けなかった。

誠が、眠れぬ夜を幾度か過ごした後の、大会前最後の練習日。

東尾中野球部は、レギュラーチーム対控え選手チームの、紅白戦を行い、レギュラーチームの誠は、定位置となっている、一番ショートで出場した。

初戦の対戦相手、旭ヶ谷中はそれほど前評判の高いチームではない。過去の実績においても、東尾中より明らかに劣る。勿論、大事な初戦であることに変わりはないが、よほどの事がない限り、取りこぼしは無いだろう。誠も、そう思っている。

油断大敵と言うが、誠は性格的に、自分を追い込むより、少し気持ちに余裕を持たせるほうが、結果を出せるタイプである。だから誠は今「初戦は問題なし」と考えている自分の精神状態を、良い兆候であると捉えている。事実、英治の球を、ことごとく捕らえ、佑介の打球をダイビングキャッチしたあの日以降も、誠は好調を維持している。

進路の事で、気持ちにゆとりが無い日々が続いているが、部活の時間が始まってしまえば、ボールを追いかけているうちに、自然と憂鬱な気持ちは影を潜め、野球だけに集中する事が出来ていた。

一回の表、最初のバッターが、誠の正面にゴロを打った。やや強めの打球。誠は、軽快なフットワークでボールに駆け寄りながらも、バッターランナーも視界の端に捕らえ、ある程度余裕を持って、刺せる、と判断した。

腰をしっかりと落として、丁寧に、包み込むようなイメージで、捕球する。一塁方向に視線を移すと、ファーストの佑介もすでに、一塁キャンバスに右足を掛けて、ミットをこちらに向けて開く。佑介のミットだけに、資格を集中させ、ボールを投げ込む。ボールがミットに収まる。ややあって、バッターランナーが一塁塁上を駆け抜け、悔しそうに天を仰いだ。

英治は続く二人も凡退させ、控えチームの攻撃は三人でこの回を終えたが、誠が打球を処理したのは、その一度だけだった。どちらかと言えば、打撃よりも守備のほうが好きな誠にとっては、やや物足りなかったが、それでも、初回の先頭打者の打球が、自分への比較的イージーなゴロだった事は、幸運だった。

公式戦でも練習試合でも、身内での紅白戦でも、一度ゴロを処理してアウトにするまでは、少し落ち着かない気持ちがある。フライやライナーでも、ひとつ処理する事で、落ち着けることに変わりは無いのだが、捕球するだけでアウトになるフライやライナーよりも、捕球と送球が必要なゴロの処理のほうが、自分のその日の状態を、より多角的に判断できるし、何より誠自身、ゴロを捌くことが好きなのだ。

バウンドするボールを追って、捕球して、グローブからボールを持ち替えて、送球する。その一連の動作を行うことで、自分の状態を確認するだけでなく、自分が試合に参加していると言う事を実感し、より深くゲームに深くのめりこめるのだ。

今日も、状態はよさそうだ。

ベンチへ引き上げた誠は、バットを持ってネクストバッターズサークルに入り、控えチームの先発投手の投球に目を凝らした。今年の春に入部したばかりの一年生、渡辺章吾だ。制球力や、ランナーを背負っての投球など、技術面はまだまだ粗削りだが、小柄な体格の割りに球速があり、マウンド度胸もなかなかのもので、青木からも「将来のエース候補」と、呼ばれている男だ。

まだ小学生の面影が抜け切っていない、あどけない顔立ちだが、鋭く吊り上った目と、ややへの字気味に結ばれた口が、レギュラーチームを打席に迎え入れても気後れのしない、負けん気の強い性格を良く現している。そのギャップが、なんとも可愛い。実際渡辺は、マウンド上のふてぶてしさとは裏腹に、普段はどちらかと言えば大人しく、先輩達に対しても礼儀正しい為、誠も含め、上級生達から可愛がられていた。

そういえば、俺も小松先輩によく可愛がってもらったっけ。あの頃から、もう二年も経ったのか。

自分よりも、二年分多く未来がある後輩を、少し羨ましいと思った。でも、自分が後輩だった頃は、自分が持っていない、先輩達の過去を羨ましく思っていた事を思い出し、誠はほんの少し、自嘲気味に笑った。

渡辺の投球練習が終わり、誠は左バッターボックスに入った。いつものように、入念に足場を鳴らしてから、バットを肩に乗せて背筋を伸ばし、マウンド上のピッチャーに顔を向ける。自分でも気づかぬほど、自然に身についたルーティンワークだ。

マウンド上の渡辺と、目が合う。誠は構えに入りながら、後輩達がまだ持っていない、自分の二年分の過去を、後輩達はどんなふうに使っているのだろう、などと考えていたが、構えを作り終えた頃には、全神経をマウンド上の投手のピッチングだけに集中させていた。

渡辺の球は、速いとは言っても、英治と比べれば劣る。技術面に關しては、比べるべくまでもない。荒れ球な分、英治より目的を絞りにくい、力んでカウントを悪くすると、置きに来る癖があるので、それを狙えば、攻略はさほど難しくない。

渡辺が、ワインドアップモーションから一球目を投じた。外角高めに大きく外れ、ワンボール。二球目も、ホームベース手前でワンバウンドする完全なボール球でツーボール。二年生のキャッチャー佐川龍平が、小刻みに肩をすくめるようなジェスチャーを交えながら、渡辺に「落ち着け」と、呼びかける。

誠は、次の一球を狙っていた。ノースリーになる前に、ストライクを欲しがって、置きに来ると読んだのだ。

その三球目。渡辺は誠の読み通りに、少し縮こまったフォームで置きに来たが、それでもボールは高めに浮いて、ストライクゾーンから大きく外れた。マウンド上で渡辺が、唇を噛み締める。これでカウントはノースリー。セオリーなら、次の一球は『待て』の場面だ。だが、そんな消極的な気持ちに、喝を入れるかのように、自軍ベンチから佑介の声が飛んできた。

「誠、甘く入って来たら打っていいぞ！」

佑介の言葉に、誠も頷く。

そうだ、後輩相手に受け身になってどうする。ノースリーだから手を出しては来ないだろうだなんて、甘い考えで置きに来ようものなら、それを狙い打ちにしてやるくらいの積極性が、今の自分達には必要なのだ。

誠は、集中力をもう一段階高めてバットを構え、マウンド上の渡辺に目をやった。渡辺は、少し追い詰められたような、緊迫した表情になってはいるが、眼光はまだ衰えてはいない。先頭打者、それも部内屈指の快足を誇る誠をフォアボールで塁に出せば、大事な

初回に先制点を献上する事に直結しかねない。それに、何より、先頭打者をフォアボールで出塁させる事は、ピッチャーにとって、この上ない屈辱である。ましてや渡辺は、顧問の青木から、将来のエースと期待されている男だ。気持ち引き締まるのも、当然だろう。渡辺が、四球目のモーションに入った。置きに来る気配など、微塵も感じさせない、小さな体を目一杯使った躍動感溢れるフォームから投げ込まれた渾身のストレートは、ストライクゾーンのと真ん中に構えた佐川のミットへ、一直線に突き刺さった。

「ストライク！」

主審青木の、右手が上がった。

「ナイスボール！」

ボールを捕ったままの姿勢で佐川が叫ぶ。

誠は、バットを出さなかった。正確には、出さなかったのではなく、出せなかったのだ。渡辺は、ここまでの三球、明らかなボール球しか投げられなかった。三球目に至っては、スピードを殺して、置きに来たにも関わらず、ストライクをとれなかったのだ。そんな投手が、ノースリーから全力投球で、ど真ん中に投げ込むなんて。これだから、荒れ球の投手はやりにくい。

誠は、一球毎に投手の配球を深く考察するタイプのバッターだ。だから、渡辺のような、細かく配球を考えるより、力で振伏せに来る、粗削りなタイプの投手には、そういった「読み」が通用しにくい為、どうにも調子が狂わされてしまう。今の一球が、まさにそうだった。

少々面食らった。だが気圧されるという程のものではない。カウントはワンスリー。まだまだ打者優位の状況である事に、変わりはないのだ。誠とて、伊達に一年時からレギュラーを任されているわけではないのだ。

さて、次はどんな球が来るのか。投手の特徴や、状況から、次の一球を読み当てるべく、思考を巡らせる。

渡辺の持ち球は、真っ直ぐの他には、縦割れのカーブがあるだけ

だったはずだ。四球続けて真っ直ぐを放ったのだから、そろそろカーブが来てもいい頃だ。ただ、真っ直ぐのコントロールさえ覚束ない渡辺に、佐川がワンスリーから、すっぽ抜けやすいカーブを要求するとは考えにくいとも言える。五球連続直球勝負という事も、十分考えられるだろう。確率としては、半々くらいか。

カーブ待ちだと、真っ直ぐには振り遅れるだろうが、少々振り遅れてもレフト前に落とす事ぐらいの自信はあるし、例え打ち損じて、自分の脚力なら、打ち上げさえしなければ内野安打も狙える。逆に真っ直ぐ待ちでカーブに泳がされれば、転がしたとしても内野安打にはなりにくい。

よし、決めた。

真っ直ぐが来る可能性も念頭に置きつつ、カーブを狙う。ただし、カウントはワンスリーなので、際どいコースは見送る。これが一番無難だろう。

その五球目。渡辺が投じたボールは、ポン、と一度浮き上がってから、緩やかな弧を描いて落ちてきた。誠の読み通りのカーブだ。

誠は、ボールの落差に、軸足の膝を折ることでスイングの高さを合わせ、素振りをするような軽さで、バットを振り抜いた。緩いボールは、力任せに引っぱたくよりも、力を抜いてしなやかにバットを振った方が、よく飛ぶ。誠の打球は、右中間を真っ二つに割るツースペースヒットになった。

「ナイスバッティング！」

誠は二塁ベースに片足を乗せたまま、小さくガッツポーズを作って、自分を称える仲間達の声に応えた。

二番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を挟むような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくファールボールとなった。キャッチャーの返球を受け取ってから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちらに視線を向けた。二塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放っている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立った時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかったとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かった。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になって、改めて振り返ってみると、あの時悔しさが込み上げてこなかった自分が、情けなく思えてくる。らと言って、危ないボールならバッターだって避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があった。なのに――

なぜ、あんなに消極的になってしまったのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかったのだろう。

野球と言う競技は、ピッチャーがバッターに対して投球すること、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーの投球とは、バッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーと言うポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙ったコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。

誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。

「井岡は、優しいからな。ちよっとピッチャーには、向いてなかったかな」

紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思った。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あった。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしても、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。

やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になって手元が狂ってしまうようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。

投手と言うポジションに、未練は無かった。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであったことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。

マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。そんな自分が、凄く惨めだった。

二番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を挟むような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくファールボールとなった。キャッチャーの返球を受け取ってから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちらに視線を向けた。二塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放っている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立った時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかったとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かった。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になって、改めて振り返ってみると、あの時悔しさが込み上げてこなかった自分が、情けなく思えてくる。らと言って、危ないボールならバッターだって避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があった。なのに――

なぜ、あんなに消極的になってしまったのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかったのだろう。

野球と言う競技は、ピッチャーがバッターに対して投球すること、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーの投球とは、バッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーと言うポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙ったコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。

誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。

「井岡は、優しいからな。ちよっとピッチャーには、向いてなかったかな」

紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思った。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あった。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしても、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。

やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になって手元が狂ってしまうようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。

投手と言うポジションに、未練は無かった。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであったことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。

マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。そんな自分が、凄く惨めだった。

二球目も、翔太はバントの構えを見せたが、渡辺の投球は大きく外角へ外れた。翔太は投球の直後にバットを引き、カウントはワンボール・ワンストライク。投球後、勢い余って一塁方向へ体を反転させた渡辺が、顔をしかめる。明らかに力んでいる。力んで体の開き

が早くなっているから、フィニッシュでバランスが崩れるのだ。

ただでさえ制球が不安定な投手だ。相手バッテリーとしては、ボール先行は避けたいはず。逆にこちらとしては、ツーストライクを取られたら、スリーバント失敗の危険がある。次の一球で、翔太に確実にバントを決めてもらいたい。

三球目は、一級目同様翔太の胸元付近に来たが、若干コースが甘い。コン、と音がして、三塁線へ、絶妙に勢いが殺された打球が転がる。二塁ランナーの誠が、スタートを切る。サードのダッシュがわずかに遅れた。ライン際で、殆ど止まりかけた打球を、マウンドから素早く駆け下りた渡辺が拾い上げるのとはほぼ同時に、誠が三塁へ滑り込む。それを見て、渡辺が身を翻し一塁へ送球する。矢のような送球だった。翔太も懸命に走ったが、後半歩及ばずアウト。

立ち上がって、ユニホームについた土を払っていると、控え選手チームのサードを守る加藤義彦が言った。

「さっき、カーブ狙ってたの？」

「うん。さすがに、五球連続真っ直ぐはないかなって思ったし」
「なるほどね」

加藤は部内で最も背が高く、中学生にして身長は180センチに達していた。どちらかと言えば小柄な誠は、加藤と話すときは、少し見上げるような格好になる。加藤はミートが上手く、二年次から代打でよく起用されていたが、守備がどうにも苦手で、ついに三年間レギュラーにはなれなかった男だ。特に今のようなボテボテのゴロの処理に、もたつく事が多かった。

ワンアウト三塁。ヒットはおろか、内野ゴロや外野フライでも一転を狙える状況だ。しかも打順はここからクリーンアップを迎える。右打席に入った英治の顔は、エースではなく、三番バッターの顔になっている。ネクストバッターズサークルで、片膝をついて待ち構えている佑介も、真剣な眼差しで、マウンド上の渡辺を凝視している。

そうだ。格下の控え選手チームを相手に、攻めあぐねているよう

では、公式戦で結果を出せるはずは無い。相手が、一年生投手であろうと、容赦はしない。この回でマウンドから引き摺り下ろすくらいのもりで、一気に攻め立ててやればいい。

佐川の指示で、控え選手チームは野手を前進させ、バックホーム体勢の布陣を敷いてきた。サードの加藤も、ランナーの誠そつちのけで前に歩み出た。

チーム一の俊足ランナーであるこの俺を、ホームで刺す気か。舐められたもんだな。いや、これは、貴重な先制点を、なんとしても献上すまいとする、相手の闘志の表れなのだろう。ならば、レギュラーチームとしては、受けて立たないわけにはいかない。

誠は、大きめにリードを取った。右投げの渡辺は、セツトポジションに入ると三塁ランナーと正対する格好になる。当然三塁ランナーの動きは丸見えだ。だがそれは、誠にも言える事。セツトポジションに入った右投手の動きが、最も見やすいのは、三塁からだ。ましてや今は、三塁手がベースから離れているのだ。

さすがにホームスチールを狙うような状況ではないが、それでも少しでもピッチャーにプレッシャーを掛けて、意識をこちらへ散らせれば、打者に対する集中力を削ぐ事が出来る。それが、リードオフマンである自分の仕事だ。

セツトポジションに入った渡辺の左足が上がり、右腕が広報へ引き絞られるのを見て、誠ホームへ向かって数歩だけダッシュした。キャッチャーの佐川が腰を浮かせて半身で捕球し、こちらを向いて送球動作に入ったが、誠はその頃にはすでに帰塁している。投球の判定はボール。アウトローのきわどいコースだったが、わずかに低かった。

ホームスチールなど、狙ってはいない。だが、少しでも後ろへ逸らそうものなら、躊躇無くホームへ突っ込む。そういう姿勢を見せておく事で、キャッチャーに対してもプレッシャーを掛ける。

英治に対しての二球目。明らかに投げ急いで手投げになっている。おまけに一球外しているものだから、ボールもつい甘いコースに言

ってしまう。それを見逃す英治ではない。

鋭い金属音が鳴り響き、打球が全身守備の三遊間を襲った。誰もがレフト前への先生タイムリーじつとと確信した当たりには、加藤が横っ飛びで飛びつく。グローブの先に、かろうじてボールが収まっている。ホームへ向かってスタートを切りかけた誠は、とっさに身を翻して三塁ベースへ滑り込む。

元の守備位置に戻ってきた加藤に、声を掛けた。

「ナイスキャッチ」

加藤が、にやりとしながら答えた。

「俺なら捕れないとでも思ってたか？」

「そういうわけじゃないけど、でもちょっとびっくりしたかな」

正直、野手の守備力と打球の速さから、捕球できるかどうかを判断している時間的余裕はなかった。

それにしても危なかった。もう少しで、ダブルプレーを取られる所だった。ワンアウト満塁のチャンスが、一気にスリーアウトチェンジになってしまう所だった。

ツーアウト三塁。せめて一点取らなくては、レギュラーの面目が立たない。

「佑介！頼むぞ！」

打席に入った佑介に、声援を送る。ちらりとこちらを向いた佑介が小さく頷いて、ゆっくりと右打席に入った。

佑介への初球。渡辺が投じたのはカーブだった。少々高めに抜けたが、佑介はこれを見送り、ストライク。先制点のチャンス、打ち気にはやる四番打者に、初球から直球勝負は危険だと判断した、佐川の考えだろう。

二球目、低めの真っ直ぐに、佑介が反応した。しかし先ほどのカーブの残像があったのか、タイミングが遅れ、打球は一塁ファールグラウンドへ転がった。口元をゆがめて、佑介が悔しがる。

四番の佑介を、ツー・ナッシングに追い込んだ。セオリーなら、次は一球外してくるだろうが、佐川が制球難の渡辺にあえてボール球を要求するかは疑問だ。

その三球目。胸元を挟る速球。佑介が、腰を引かせて小さく後ろへ飛び退くほど際どいボールだったが、渡辺は平然として佐川に返球を催促するように、グローブを慌しく開閉する。

思いの他強気なバッテリーに、誠も気持ちを引き締めた。ここまですべて、どこかで相手を格下と見て、見下している部分があったのかもしれない。実際、チームの自力は、自分たちのほうが明らかに上だろう。だけど、相手だって、やるからには負けるつもりなど無いはずだ。渡辺の強気な投球と、それを引き出す佐川のリード。そして、加藤のダイビングキャッチ。まだ一回の表だと言うのに、相手はこれほど気迫溢れるプレイを見せている。相手を格下と見くびっている強豪が、反骨精神に燃える弱小チームに足元をすくわれる。そんな場面は、何度も目にしてきた。一発勝負のトーナメントでは、そんなわずかな気持ちの綻びが、命取りになるのだ。

俺なら、捕れないとでも思ったか？

少し自虐交じりだけど、確かなプライドを覗かせた、加藤の言葉

を思い出した。少し、相手の気迫に飲まれそうになった自分がいることを知り、弱気になりかけた自分に発破をかける。

負けたくない。もう、自分の心の弱さに打ちのめされるのは沢山だ。実力からすれば、俺達がまけるはずは無いんだ。チームメイトといっても、チーム内ではポジション争いをしてきた、競争相手でもあるのだ。遠慮なんかするな。どちらが上なのか、はつきりさせてやれ。足りない技術を、向こうが気持ちで乗り越えようとするのなら、気持ちの面でも相手を圧倒してやればいい。

誠は、半ば自分に言い聞かせるように叫んだ。

「佑介、遠慮すんな！思いっきりぶちかましてやれ！」
「おう！」

視線は渡辺に向けたまま、佑介が答える。

佑介への四球目。渡辺も開き直ったのか、windアップからの投球だった。投じたのは、勿論、渾身のストリート。コースはど真ん中だ。佑介の腰が鋭く回転し、大きく振り抜いたバットが快音を響かせる。

高々と舞い上がった打球は、あっという間に外野手の頭上を越えて、さらにその向こう側にある金網の、遥か彼方へと消えて行った。

初回到佑介の先制ツーランを浴びた渡辺は、二回と三回にも、それぞれ一点ずつ失い、三回限りで降板した。二番手でマウンドに上がったのは、二年生の左腕、下山昌治で、この日が投手デビューだった。スピードは渡辺に劣るが、大きく曲がるスローカーブでタイミングを外す、緩急をつけたピッチングは、同じ持ち球でも渡辺とはまるで異質で、四回のレギュラーチームは、三者凡退に抑えられた。しかし、次の回には下山を捕まえ、一気に三点を追加。時間の都合で、紅白戦はここまでとなり、五回の裏を行うことなく終了。控え選手チームは、英治の前にわずかに安打に封じられ、二塁を踏むことすらかなわなかった。終わってみれば、8対0で、レギュラーチームの圧勝に終わった。

明日の土曜はオフ日。明後日の日曜日が、いよいよ一回戦だ。

帰宅して、床に就いた誠は、最後の公式戦を目前に控えて、東尾中野球部で過ごした三年間を振り返った。

二学年先輩の辰弥に憧れ、必死に背中を追いかけていた二年前。その辰弥達が抜け、チームの主力として期待されながらも、結果を出せなかった、去年。そして、野球への熱意と、それを全うできないかもしれないと言う不安に悩み続けながらも、最上級生として、チームを引っ張ってきた今年。

楽しい事ばかりではなく、辛い事もあった。だけど、辞めたいと思った事は、一度もなかった。誠は、東尾中野球部が、心底好きだった。では、仲間達は、どうだったのだろうか。懸命な努力も報われる事なく、野球を続ける事を諦めてしまった隆や、三年間代打要員で終わってしまった加藤。退部した隆はともかく、加藤ら三年生の控え選手達は、この最後の公式戦を、どのような気持ちで迎えようとしているのだろうか。一年からレギュラーとして試合に出ていた誠達や、自分達を差し置いてレギュラーになっている後輩を、どんな

目で見ていたのだろう。そういえば、加藤は以前、高校では野球部には入らないと言っていた。もし、東尾中でレギュラーになれていたら、加藤は高校でも野球を続けようとしたのだろうか。

誠自身、先輩達を差し置いて自分が試合に出ていた事は、彼らに對して申し訳ないという気持ちがあった。だからこそ、試合で恥ずかしいプレイは出来なないと思い、必死に練習に取り組んだ。チームの誰よりも、熱心に練習に取り組んで来たと思っている。その積み重ねが、西崎からスカウトに繋がったのだ。

だけど、隆のように懸命な努力が、結果に繋がらなかった者もいる。加藤だって、守備練習の時は、傍目にもわかるほど真剣な目つきで取り組んでいたのだ。それでも、最後まで加藤はレギュラーにはなれなかった。

努力が必ず報われるなんて言葉を信じるほど、現実を知らないわけじゃない。そんなものはただの安っぽい詭弁だ。

自分が、三年間努力し続ける事ができたのは、その努力が、それなりに報われてきたからだ。それに、誠は野球を始めた時から、打撃も守備も走塁も、ある程度なんでもこなせていた。もともと、基本的に運動神経が良かったのだ。それは、誠が努力して手に入れたものではない。先天的に、自分に備わっていたものだ。その“授かり物”があったからこそ、誠は努力できたのだ。

もし、生まれつき運動が苦手で、努力も報われず、三年間控え選手のままだったとしても、同じように熱心に野球に取り組むことが出来ただろうか。自分のような心の弱い人間に、そんなことが出来ただろうか。おそらく、いやきつと出来なかっただろう。自分の努力も、熱意も、持って生まれた素質あってこそそのものなのだ。それだけは忘れてはならない。

今度の大会も、おそらくいつもどおり、一番・ショートでスタメン出場する事になるだろう。レギュラーに選ばれると言う事は、チームを代表して、チームの看板を背負って、試合に出ると言う事だ。出たくても出られない選手のほうが多い中で、試合に出させて貰う

以上、彼らを納得させられるプレーをしなければならぬ。「俺達を差し置いて試合に出てる奴が、あんなに下手くそなのか」なんて思わせてしまつては、彼らに合わせる顔が無い。

東商で野球が出来るかどうかなんて、今は関係ない。今はただ、東尾中野球部の一員として、東尾中野球部の為に、仲間達の為に、ベストを尽くそう。

そう心に決めて、誠は静かに目を閉じた。

誠が目を閉じた直後、机の上で充電中の携帯電話が鳴った。マナーモードになってはいるが、バイブレーターの振動が音を立てている。ベッドから出て、携帯を手に取りディスプレイを開く。消灯された部屋の中で無機質な光を放つディスプレイには、佑介の名が表示されていた。通話ボタンを押して、携帯を耳に当てがう。

「もしもし」

「もしもし、誠？俺だけど、もしかしてもう寝てた？」

「ん、まあ、そろそろ寝ようかなってタイミングではあったけど」

「そっか、ごめんごめん。あのさ、明日なんだけど、部活休みじゃん？お前空いてる？」

明日は、大会前のラストスパートでたまった疲労を癒すべく、ゆっくりと休養を取るつもりだったので、何も予定は入れていない。

「うん、空いてるけど」

「じゃあさ、明日二人でキャッチボールしようぜ。小学生のときいつもやってた公園でさ」

「佑介と、二人だけ？」

「そう、お前と俺、二人だけ」

断るつもりは全く無かったが、ほんの少し、考えた。最後の大会を目前に控えたこのタイミングで、佑介が自分と二人だけでキャッチボールをしようという誘ってくるという事の意味を。

「いいよ。何時から」

佑介の意図を測りかねながらも、誠はその誘いを受けようと思った。きっと、明日ボールを投げ交わしている時に、それがわかると思っ

「十時でどう？そんで、昼前に解散して、午後はゆっくり休もうぜ」

「OK、十時な」

「おう、じゃ、よろしくな」

携帯の電源ボタンを押して、通話を切った。折り畳んだ携帯を元の場所に置いて、ベッドに戻る。

通話を切る時に、それとなくディスプレイのデジタル時計で確認した時間は、わずかではあるが十二時を回っていた。佑介が、何を思っこんな時間に誘ってきたのか、やはり少し気になったが、目を閉じるとすぐに眠気が襲ってきた。誠はいつも、日付が変わる前には眠りにつく習慣をつけているのだ。

規則正しい生活って、やっぱりしとくもんだな。

そんな事を思いながら、誠は眠りに落ちて言った。

翌朝、待ち合わせの時間より十分ほど早く、誠は公園に着いた。辺りを少し見回したが、佑介は、まだ来ていないようだった。誠はベンチに腰掛けて、佑介の到着を待った。

公園には、すでに犬の散歩をしている老人や、砂場で遊んでいる子供とその母親と思しき女性など、すでに先客がいて、気温が上昇しきる前の夏の朝を、穏やかに彩っていた。

砂場で泥だらけになって遊んでいる小さな男の子を見て、誠は自分もかつて、美奈子に連れられて、同じように泥だらけになって遊んでいた事を思い出した。それから何年か後に、小学校に上がって、野球と出会い、佑介と出会い、チームの練習が無い日は、ここでよく雄介たちとキャッチボールをした。だけど、中学に上がってから、練習量が増えた事もあって、ここへ来る事は殆ど無かった。ここへ来るのは、本当に久しぶりだった。

「誠」

佑介の声がした。声の聞こえた方へ振り向くと、佑介が小走りにこちらに近づいてきた。

「悪いな、遅くに電話しちゃってさ。でもなんか、久しぶりにここでお前とキャッチボールしたくなっちゃってさ」

「随分、久しぶりだよな、ここでやるの」

「ああ」

そう言って、屈伸運動を始めた。誠も立ち上がり、軽くストレッチをする。

「そろそろやろうぜ」

準備運動を始めて、数分ほど経った頃、佑介が言った。

「ああ」

誠も頷く。

佑介が、数メートル程距離をとってこちらに向き直り、左手のミ

ットを軽く上げた。その合図に、誠は軽く頷き、緩やかなフォームで、一球目を投げた。佑介が、ミットに収まったボールを右手に持ち替え、やはりゆったりとしたフォームで投げ返す。

肩が温まるのに合わせ、徐々に距離を広げ、しっかりと体重を乗せたボールを投げ込んでゆく。ただし、明日のことを考えて、お互い全力投球はしない。特に事前にそう打ち合わせたわけではないが、こと野球に関しては、言葉にしなくてもある程度気持ちが通じる程に、この男とは長く、そして濃密な時間を共に過ごしてきたのだと、改めて感じる。

なにか言いたい事があって、誘ったんじゃないのか。

佑介に、そう聞いてみたい。だけど、できれば佑介から、切り出してくるのを待っていたい。

「へい、ショート!」

佑介が、不意にゴロを投げてきた。誠はこれを軽快に捌き、いつもの様に一塁へ送球する要領で、佑介へ投げ返す。

「もう一丁!」

今度はボテボテのゴロだ。ダッシュして地面の砂ごと拾い上げるようにして捌き上げ、そのままグラブトスで佑介に返す。そのまま小走りに、“守備位置”まで戻る。

「よし、来い!」

腰を落として、グローブを拳でひとつ叩く。自然に笑みがこぼれてくる。佑介も笑っている。楽しい。試合でも、部の練習でもない公園で佑介と二人で、ただボールを追いかけているだけ。たったそれだけのことが、こんなにも楽しい。

誠は、夢中になって佑介が投げるボールを捌いては投げ、投げてはまた捌いた。

そういえば、小学生の頃はここでもこんなふうには、佑介と二人で、暗くなるまでキャッチボールをしてたっけ。

「ラスト!」

最後の一球を捌き、佑介が返球をしっかりと受け止めたのを見届

けて、誠はふうつ、と息をついて、天を仰いだ。

「こんなもんにしとこうか」

佑介の声に、誠は無言で頷いた。

「なんか飲み物買ってくるよ。付き合ってもらったから奢るぜ。何がいい？」

「じゃあ、なんか、スポーツドリンク的なやつ」

「OK」

そう言って、佑介は公園の入り口のそばにある、自販機の方へ歩いて行った。

「ほい、お待たせ」

ベンチに座って待っている誠の所へ、佑介が戻ってきて、スポーツドリンクの缶を誠に差し出した。

「ありがとう」

手のひらに伝わる、缶の冷たさが心地よく、一度間を両手で握り締めてから、開封し一気に半分ほど飲み干した。

額から汗が噴き出し、心地よい疲労を全身に感じた。

「いよいよ、明日からだな」

誠の隣に腰を下ろしながら、佑介が言った。

「うん」

誠が答える。お互いに、視線は合わせない。

「あのさ」

佑介が、何か言いかけた。

「うん？」

「うーん……なんて言ったらいいのかな」

なんとなく、佑介が何の話をしようとしているのか、何の為に、ここに自分を呼び出したのか、わかるような気がしていた。

「東商の事？」

切り出しづらいのはお互い様だし。黙って佑介が切り出すのを待っているだけじゃ、申し訳ないような気がして、こちらから切り出した。

「うん、あの、お前にはお前の事情があって、俺がこんな風に口出しするような事じゃないのかもしれないけど、でも、やっぱり、なんていうか、ずっと一緒ににやってきたし、俺は、東商でもお前と一緒に野球したいんだよ。でも、その……」

佑介はそこまで言って、言葉に詰まってしまったのを誤魔化すように、ひとつ大きく息を吸ってから、再び口を開いた。

「誠は、俺と違って頭も言いし、そういう意味で考えたら、その、東商には行かせたくないっていう、おじさんの気持ちもわかるような気がするし、お前にとっても、長い目で見たらその方がいいのかもしれないから、もし、お前が、そんな事、思っていないのかもしれないけど、もし、そうなっちゃったら、お前と野球するのも、中学が最後になるから、だから、その、なんて言ったらいいんだろう……」

そこまで言って、佑介はまた言葉に詰まってしまった。開いた膝の上に肘を乗せて、うなだれるような姿勢になっている。

「もういいよ、そんなに無理しなくても」

途切れ途切れで、たどたどしい言葉だけれど、懸命に胸の内を伝えようとしてくれている。どんなに歯切れの良い理路整然とした言葉よりも、真摯な想いが伝わってくる。

「なんとなくだけど、佑介が言いたいこと、よくわかった気がする。ありがとう」

ここまで、自分の事を想ってくれる友達がいる。今は、ただそれだけで良い。その気持ちだけで、凄く嬉しい。

「俺の進路がどうなるにしろ、俺達が東尾中の野球部の仲間と試合するのは、今回が最後だ。中学生生活の最後に、悔いの残らない試合をしようぜ」

「ああ、なんか、わるかったな、ごちゃごちゃ余計な事ばかり言っただけ、大事な時なのに」

佑介は、本当に申し訳なさそうに言った。

「なんで、謝るんだよ。そこまで自分の子と考えてくれてる奴がいるんだ、って思って、嬉しかったよ、ほんとに。ほんと、ありがとうな」

「うん」

誠は、ポケットから携帯電話を取り出して、時間を確かめた。

「もう十一時半か、そろそろ帰ろうか」

「ああ、せめて午後ぐらいは、明日のために体休めとか無きゃな」

公園を出たところで、別れの言葉を交わして佑介と別れ、誠は家路に着いた。

帰宅した誠は、シャワーを浴びてから昼食を摂り、自室のベッドで横になっていた。とはいえ、まだ昼の一時を少し過ぎたばかりである。何をするでもなく、何度かごろごろと寝返りを打った後、本棚から高校野球の雑誌を取り出し、ぱらぱらとページをめくった。

表紙に書かれた東尾商業の文字が目に入り、迷わず購入したものだ。辰弥が記事に乗っているかもしれない。そう思って雑誌を購入した誠だったが、記事になっていたのは、今年東商野球部に入学した期待の一年生大谷孝介の特集だった。それでも誠は、迷わずその雑誌を、書店のレジカウンターに持っていた。

大谷の名は、その雑誌を購入する前から、誠も知っていた。一年生にして、東商の四番を任された男として、市内の野球ファンの間では、すでに有名な存在だった。

高校球児のお約束である坊主頭。よく日に焼けた顔には、太い眉毛と鋭い光を放つ双眸と太い鼻筋。肩幅が広く胸板の厚い、がっしりとした体。プロフィールには、身長百八十一センチ、体重八十四キロとある。すでにプロ並みの体格である。

小学生の頃から硬式野球をしており、強打者としては勿論、投手としても、高校一年の現時点ですでに百四十キロに達する速球を投げているという。東商では、四番ライトでスタメン出場し、終盤にリリーフ投手としてマウンドに上がる、と言う起用法が定着しているそうである。雑誌には、大谷インタビューに応じる姿や、バッティングフォームとピッチングフォームの連続写真が掲載されている。その脇に評論家の解説が書かれており、その解説によると強靱な背筋とリストが、最大の持ち味であり、将来的には打者としてのほうが期待値が高いが、投手としての可能性も捨てがたい、とのことである。

バッティングのスウィングも、ピッチングの腕の振りも、大きな

フォロースルーが印象的で、まだ実際に大谷のプレーを見たことは無い誠でも、そのダイナミックなプレースタイルは、容易に想像できた。

インタビュー記事には、『古豪復活の鍵を握る超新星・父と二人三脚で追い続けた夢』という見出しの後に、大学野球で活躍しプロ入りを囑望されながらも、怪我でプロ入りを断念した父に、幼い頃から野球の厳しい指導を受けてきた事、将来はプロ入りは勿論、メジャーリーグへの挑戦も視野に入れている事などが書かれている。その中に、誠にとって、どうしても気になるコメントがあった。

「自分のプロ入りは、父と自分との二人分の夢です。でも、僕は父に為に野球をしているという意識はありません。父の影響で野球を始めたのは事実だけど、自分はいくまで、自分がプロになりたいから野球をやっています。勿論、それを誰よりも応援して支えてくれたきた父には本当に感謝していますし、父が自分のプロ入りを喜んでくれば、僕も嬉しいですけど。気が早いかも知れないけど、プロになったら契約金は全部父にあげようと思っています」

これだ。

自分と義秀の間にある最大の障壁は、これなのだ。

雑誌を閉じて本棚に戻し、誠はまた一人キャッチボールをしながら考えた。

井岡誠と大谷孝介。二人の少年が、いずれも“父が示す道”を歩んでいる事に違いは無い。だが誠が、自分の意思とは無関係に、父が示す道を歩まされているのに対し、大谷は自分自身もそれを望んで歩んでいるという所に、決定的な違いがある。

誠自身が思い描く“自分は将来こうなりたい”というビジョンと、義秀が思い描く“誠に将来こうあって欲しい”というビジョンは違う。だから今、井岡父子の間には大きな溝ができてしまっている。でも、大谷親子の場合は、それが一致している。同じ夢を追い求めて、共に歩み続けてきた大谷父子は、硬く強い絆で結ばれている。

そこでまた、誠は木田の事を思い出した。大谷と同じく、父に厳

しい野球の指導を受けていた木田。でも木田自身の気持ちと、木田の父の気持ちには大きな隔たりがあり、誰も望まぬ最悪の結末を迎えてしまった。

木田の父も、息子が憎くて厳しい野球の指導をしていたわけではなかったのだろう。木田の父も、自分なりに、野球をさせることが息子にとってプラスになると思って、したことだったのだと思う。

義秀は、どうだろう。自分が憎くて、自分から野球を取り上げようとしているのだろうか。それはきっと違うだろう。義秀が、自分に厳しく勉強をさせていたのは、それが誠の為だと思っているからだ。それは、誠自身もわかっているつもりだ。

でも、父さん。俺、勉強だけが全てじゃないと思うんだ。他の事何もかも犠牲にして勉強したって、きっと楽しい人生なんか待っていないと思うんだ。それじゃ意味無いだろ。

自分が考えている事は、決して間違っではないと思う。でも、父が言う事も、正しくないとは言いい切れない。どちらも一理あると思う。ならば、自分が進む道は、自分の意志で決めたい。

やっぱり、俺はどうしても野球を諦めきれない。

明日から始まる大会が、自分の野球人生最後の公式戦だなんて思いたくない。これから、もっともっと、野球がしたい。その気持ちを、父にわかって欲しい。受け入れて欲しい。でも、その方法がわからない。

誠は苛立ちを振り払うかのように、大きく反動をつけて起き上がった。少し乱暴に扉を開き、部屋を出て、リビングのソファにどさっと座り込む。何か目的があったわけではない。ただもどかしくて何もせずに入られなかったのだ。その音で気がついたのか、キッチンから美奈子が顔を出した。

「あら、ずっと静かだから、もう寝ちゃったのかと思ってた」

少し困惑気味の声色に、またしても自分の顔がこわばっている事に気づく。

「こんなに早くに寝ちゃったら、へんな時間に目が覚めちゃうよ」

できるだけ軽い声で言おうと思ったが、上手くいえなかった。

「それもそうね」

美奈子が苦笑気味にそう返したが、それ以上会話は続かなかった。外から微かに聞こえてくる蝉の鳴き声が、気まずい沈黙を際立たせていた。

重苦しい沈黙から何とか逃れようと、誠はテレビのリモコンを手にして、電源を入れた。特に見たい番組があるわけではない。ただリモコンを握る手を止めていることすらもどかしく、でたらめにチャンネルを切り替える。衛星放送のプロ野球中継の画面が映った所で、ふとりモコンを持つ手が止まった。

誠は、ぼんやりとテレビの画面を眺めていたが、視界の端に、あの時と同じような、悲しげな母の顔が見えて、一瞬チャンネルを変えるか、テレビを消そうかと考えたが、そんな事をすれば余計に母に心配を掛けるだろうと思い、母の表情に気づかぬ振りをしながら、テレビの画面を見つめていた。

テレビ画面に映るプロ野球選手達。厳しい競争を勝ち抜き、狭き門を潜り抜け、さらに厳しい競争の中に身を置いている彼らは、一体どれほど強靱な精神力の持ち主なのだろう。彼らの中には、親に野球を諦めさせられそうになった者はいなかったのだろうか。いたとしたら、どうやって親を説き伏せたのだろうか。それとも、彼らは皆、幼少時から圧倒的な能力を発揮していて、親でさえもその将来に夢を託したくなるような、類稀な才能の持ち主だったのだろうか。

いや、そんなことは無いはずだ。プロ野球選手の誰もが、常に野球エリートだったわけではない事は、誠も知っている。高校時代は、控え選手だったような男が、大学で素質を開花させ、一流のプロ選手になった例も、決して珍しくは無い。逆に、プロ入り前に輝かしい実績を残していたものが、プロでは全く日の目を見ることなく、ひっそりと引退していくことだって、よ 才能と努力。何をするにしても、成功するためには不可欠なものだと思う。でも、つい先日にも考えたように、努力ができると言う事にも、少なからず幸運に恵まれた部分が必要になってくることも、また事実だと思う。偶然熱意を注げるものに出会えた者。偶然稀有な資質を持って生まれた

者。それらに巡り会う幸運に恵まれた者だけが、自分の才能を存分に發揮する事ができるのだろう。才能と運。どれも努力だけでは決して手に入らないものだ。ならば、努力する事は不毛な事なのだろうか。才能や運に恵まれていない者は、どんなに努力しても報われないのだろうか。ならば、全ては運次第なのではないだろうか。

そんなの、認めたくない。認めたくないけれど、どこかで認めざるをえない部分があるとも思う。だとしたら、この世はなんて理不尽で、なんて無慈悲で、なんて不条理に満ちているのだろう。

悶々として気持ちで野球中継を見ていたら、いつの間にか試合は終盤に差し掛かっていた。窓の外に映る美しい夕焼けが、どこか物悲しい憂いを帯びているように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2735w/>

理由ある反抗

2011年10月8日03時20分発行